

# 美の普遍性と文化的多様性に関する哲学的探求

富樫豊主催による研究談話会における思想的交流を通じた人間存在の諸相に関する省察 (5)

A PHILOSOPHICAL INQUIRY INTO THE UNIVERSALITY AND CULTURAL DIVERSITY OF BEAUTY  
Reflections on the Human Condition Through Dialogical Engagements with the Transdisciplinary Research  
Colloquium hosted by Dr. Yutaka Togashi, Part 5

岡田 成幸<sup>1</sup>, 川崎 一郎<sup>2</sup>, 橘 美知子<sup>3</sup>, 熊澤 栄二<sup>4</sup>, 外岡 豊<sup>5</sup>

*Shigeyuki OKADA, Ichiro KAWASAKI, Michiko TACHIBANA, Eiji KAMAZAWA, and Yutaka TONOOKA*

<sup>1</sup>北海道大学名誉教授, 工学博士, 地震防災計画学

Hokkaido University, Professor Emeritus, Doctor of Engineering, Earthquake Protection Planning

<sup>2</sup>京都大学名誉教授, 理学博士, 地震学

Kyoto University, Professor Emeritus, Doctor of Science, Seismology

<sup>3</sup>滋賀大学名誉教授, 芸術学修士, 芸術学

Shiga University, Professor Emeritus, Master of Fine Arts, Science of Art

<sup>4</sup>石川工業高等専門学校, 教授, 博士 (工学), 建築論

Institute of National College of Technology, Ishikawa College, Professor, Doctor of Engineering Architectural Theory

<sup>5</sup>埼玉大学名誉教授, 工学博士, 環境政策学

Saitama University, Professor Emeritus, Doctor of Engineering, Environmental Politics

## 要約

本論文は研究談話会 E-mail 往復書簡シリーズの第5弾である。「美と芸術」を主題とした研究談話会の討論を契機に、建築における「強・用・美」の三要素に対する再考を試みるものである。まず岡田により、カントの美学を手がかりに建築における“美”が単なる装飾ではなく、普遍的価値や持続性に寄与する要素であることを私論として提示し、それをテーゼとし、ドナルド・キーンの日本文化理解を起点に、西洋と日本における美意識の差異、特に「理解する美」と「想像を喚起する美」の対比を通して、文化的審美眼の多様性を浮き彫りにする。さらに、建築空間における「実」と「虚」、そして「聖」の次元をめぐる議論を通じて、美が倫理や未来志向の価値観といかに結びつくかを探る。西洋哲学の限界と東洋的感性の可能性を踏まえつつ、科学技術の進展と人為的災害への応答において、美意識が果たしうる役割を問い直すなど、質問・反論を通して哲学的かつ実践的な省察が展開されている。

**Keywords:** *Aesthetic Consciousness, Fine Art, Firmitas, Utilitas, Venustas, Purposiveness without Purpose*

美意識, 芸術, 強・用・美, 目的なき合目的性

## I. 2023年8月例会(「美と芸術」についての自由討論会)の視聴感想

### ■1. 岡田→皆さま:美に関する私的考察

2023年9月16日(土) 12:04

#### 1. はじめに

8月例会(テーマ:芸術とデザイン)には参加できなかったのですが、配信された動画を視聴しました。これまで「美」についてまじめに考えたことはなかったので、動画は大変に刺激的でした。建築工学科出身にもかかわらず、これまで「美」について考えてこなかった理由は、学部2年(1973年)で建築工学科を専攻したのですが、その講義に冷めてしまったからでした。当時の私が大学に求めたものは、学術領域への好奇心(熱い思い)・その領域のコア理論と技術(理論体系)・領域の歴史(開拓者の生き様)・何でも良いのですが、講義でその領域の芯の部分を伝承されることでした。しかし、講義中の先生方は何を伝えたがって

いるのか、さっぱり理解できませんでした。「建築構造は略算法なのか?」「建築計画は自分で途を探せということなのか?」という疑問だけが残り、言葉で説明できないのが建築学だと割り切り、「美」はセンス」との当時の理解の元、私の考察の対象外となってしまいました。言葉にできないものほど価値があることに気がついたのは、かなり遅くなってからでした(後述)。

さて9月8日、富樫先生から「美学」について岡田の思うところをレポートにせよという下知を受けました。これまでほとんど考えたことのないお題でしたので、考察までは行かず、思いつきをしたためさせていただきます。よって、数日後には考えが変わっているかもしれません。その程度のこととご理解ください。

#### 2. 強用美について

なぜ、当研究談話会においてこのようなテーマが取り上げられたのか分かりませんが、動画では佐久間先生の語りから始まっていました。ウィトルウィウスが

提示したといわれている建築の3要素「強・用・美」の理解の仕方についての質問に対して、熊澤先生による西洋建築史からの解説は明快でした。当時のローマ時代の建築のとらえ方として、

**Firmitatis(強)**:耐久性があること。

**Utilitatis(用)**:説明は特にありませんでしたので、通常理解(利便性)とします。

**Venustatis(美)**:ローマ人は美の法則性を量と質のバランスで捉えていたようだ。

この説明に対して佐久間先生は、「強用美では建築物の永続性が無視されていると感じていて、建築物は利他的な造形物であり社会的公共資本にはなり得ないのかとの疑問があったが、“Firmitatis(強)”に時間的要素が含まれていたとの説明で払拭された。」との感想を述べられていました。

私は、“Venustatis(美)”にも時間的要素が含まれているのではないのかとの感想を持ちましたので、以下の章で若干の考察をし、もう一度「強用美」に戻ってきたいと思います。

### 3. “美”を論じる学術的領域

色々な研究者が“美”について論じていますが、考察領域としては以下の4つが挙げられるような気がします。

- (1) 哲学的考察:カント『判断力批判』における美的判断
- (2) 科学的考察:黄金比、比例、シメトリー、バランスなどの数量的考察
- (3) 脳科学的考察:人は美に触れたとき脳のどの部分が活性化するかという解剖学的考察
- (4) 感性的考察:アートの世界

ここでは、カントの哲学的考察を整理し、そこから強用美について私の考察をしたいと思います。

### 4. カントによる哲学的考察に対する私の理解

イマヌエル・カントは、彼の著書『判断力批判』の中で、難解な言葉を使って美についての考察を深めています。美は趣味判断であり、ある契機として私たちとの間に関係性を持つとし、それは目的なき合目的性であり、「ある対象において合目的性が目的の表象なしに知覚されるばあい、対象の合目的性の形式が美である。」と結論づけています。何を言っているのでしょうか。以下、このように解釈できると思います。

ある対象が美しいと感じる場合、その対象が存在する目的(たとえばナイフという人工物もつ切断という機能)とは関係なく(これをカントは目的なき合目的性と表現しているのでは)、ただ見つめていたい(鑑賞し続けたい)という思い(これが、目的の表象なしに知覚されることと、カントが表現しているのでは)が生まれたとき、そこには“美”という形式が存在する、と言っているのだと私は解釈しました。

美に関する判断の必然性は経験によって確立されるものではないと言っています。すなわち、美の対象として判断するかどうかを選択する能力は経験ではなく、自然発生的に人間が持っている能力とする考え方であり、この能力が人間に備わっているから、自分が美しいと感じたことに対して、他人の同意を得ようとするのでしょう。もしこのような美の対象を選択する能力が自分だけのものであるなら、美に対しての賛同を他人に求めようとはしないはずですが。

美的判断は、その人の主観によって判断していると認識されるものではありません(これを趣味判断といっています)、その判断結果に普遍妥当性があるものであり、よって、「美は、客観的な概念を持たずに、誰もが美しいと感じるという必然性を持ったものである。」とカントは結論づけているのです。結論的に言うと、カントは「美なるものは、誰もが美しいと感じる普遍性を持つものである」と言っ

ているのではないのでしょうか。

### 5. 強用美に関する岡田の私的考察

カントによる“美”の哲学的定義を、ローマ時代の建築の3要素「強用美」に当てはめて考えてみましょう。ローマ時代において **Firmitatis(強)**に時間的要素を盛り込んだとしても、残る **Utilitatis(用)**を備えることで、建築物をその場しのぎの「用」で済ませようという思いはなかったであろうと思うのです。熊澤先生はローマ人の美的感覚をバランスで説明されていましたが、ではなぜバランスの良いものが美しいと感じるのか、そして建築物には **Venustatis(美)**がなぜ必要なのかについての説明はなかったように思います。私は、建築物の持続可能性を高める一要素として“**Venustatis(美)**”を持ち出しているような気がしました。

カントによれば、「美とは客観的な概念を用いず、誰もが美しいと感じるという必然性を持ったもの」との解釈です。このカントの解釈が彼の生前からの普遍的真理であるなら、少なくともその時代(ローマ時代)のその社会において普遍的に認められているものであれば、強用美を備えた建築物は維持されるべきもの(誰もが普遍的に感じる“美”を建築物が備えることによって、普遍性を維持しようと考えた)となるのではないのでしょうか。カントが言うように、美が普遍的な感覚であることの証左は、ローマ時代において建築の要素として強用美(特に“美”)を唱えたことこそがその証左となりましょう。強と用は誰もが認識できる共通の性質です。

同列に美を並べたことは、美の感覚も誰もが共通して賛同できるということとその当時から理解しており、美に関する共通尺度を当時の社会において保有していたと言っているのではないのでしょうか。カントが指摘するまでもなく、美にも絶対的尺度があると言っており、美の普遍性はローマ時代においてすでに証明されていたと言っているのではないのでしょうか。

以上が、私が勝手に解釈した強用美の“美”を建築物の要素の一つにした理由となつてはいないのでしょうか。

### 6. “美”とは何かという、岡田の感性的考察

#### (1)言葉にできないものを感じる“美”

3章において“美”を考察する領域として「感性的考察」を挙げました。この観点から少し考えてみます。1章「はじめに」において、言葉にできないものの価値に気づくのが遅れたことを吐露いたしました。気づいた結果が、以下のことです。

言葉にできないが、みんなが普遍的に求めるものを“美”という概念でくくることはできないか

たとえば、“強さ”を求めたとしても、みんなが求めるのは単なる“強さ”ではなく、“美的強さ(美しい強さ)”とでも言えるものなのではないのでしょうか。みんなが追い求めるものには、共通してそこには“美”なるものが介在しているのではないかと、という提案です。美しい強さもあれば、ごさかしい強さもある。美しい愛もあれば、汚れた愛もある。すべての言葉に“美しい”という形容詞をつけることが可能であり、“美しい○○”と表現すれば、それは最上級の表現となります。逆に“美しくない○○”と表現すれば、すべてが「汚らわしい○○、汚れた○○」というネガティブな響きがまわりついてきます。

#### (2)言葉の試行実験

試しに、「汚物」という言葉に美しいをつけてみましょう。“美しい汚物”。どうだろう。汚物になにやら崇高さが付加されたように感じませんか。単なる“汚物”が、汚物にも汚物たる“用”があり、その用を達成した“汚物”は、単に汚れたものとい

う存在ではなく、その役目を果たした潔さが認識され、そこにはある種の“美に至った感覚”が醸し出されたのではないのでしょうか。人が求めるもの、それが“美”であるというのは、言い過ぎではないような気がします。

### (3)美の語源

あえて言うならば、みんなが共通して追い求めるものこそが“美”と表現できるものなのではないでしょうか。美の語源に、愛があるといます。原初的には“親族の愛”なるものを“愛”と言っていたようですが、室町時代にはそれが転じて「小さいものへの“愛”」という表現となり、愛→いとおしさ→愛おしさ→愛しさ(読み替えて、うつくしさ)→美しさ→美へと転移していったという説明が、『広辞苑』にありました。“美しい”は“愛しい”とも書くのは、その転移が理由なのでしょう。

### (4)“美”から“美意識”への転換

言葉にできない「生き方」「世界観」「イデオロギー」「ビジョン」これにも“美しい”を冠してみましょ。「美しい生き方」、「美しい世界観」、「美しいイデオロギー」、「美しいビジョン」・・・そのようなものは実は存在しません。なぜなら、カントの言明に反するようですが、“美”なる表象は時代背景や社会構造により変わるものだから。しかし、ヒトはその普遍的なものを求めようとして、哲学や芸術や人類学などの学問を探究し続ける。学者でなくても、求めようと続けて生きています。その“美”を追い求める意識は普遍であろうと思います。それが美意識というものであり、ビジネス世界においても普遍的ターゲットになっているのだと思います(『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか? 経営における「アート」と「サイエンス」』(山口周, 光文社新書)という本もあるくらいですから)。

言葉にできない(アルゴリズム化できない)から、他人にはまねのできない新たな創造物・新たな生き方・新たなビジネスモデル等々を創出することができるのです。すなわち他人にはコピーされない、パクられないオリジナリティの源泉が、美意識と理解されているのです。その人の生き様からしか学ぶことはできないもの・言葉にできないこと(すなわちアルゴリズム化できないし、学習データとして可視化できないので ChatGPT ではまねのできないこと)こそが、価値のあるものなのだと思います。

この“美意識”はカントの言う“美”とは本質的に違う類いのものと位置づけられます。ヒトの感性が関わる意識であるから。感性は経験を通して養われるもの。生まれたばかりの赤ん坊には感性を磨く能力は備わっていないかもしれないが、そこに経験が加わらないと美意識は育ちません。カントが言う美しいかどうかの判断とは異なり、自分なりに“美”とは何かについての結論を求めようとする意識、それを追究しようとする意識が“美意識”であり、経験を通してのみ、美を探求する価値に気づくのだと思います。

## 7. おわりに

8 月例会のレコーディング動画を拝聴し、先生方の発言を聞いてみると、皆さま全員から美意識を感じました。

### 蛇足ながら 前衛的芸術家・デザイナーが珍重される理由

パリコレクションなどのファッションショーを見ていると、前衛的デザイナーの作品は美から遠いものと感じてしまいます。これはカントが言うところの、鑑賞の対象が「服」という概念目的を持って我々が判断しているからであり、自然美の対象ではないからという解釈も成り立ちましょう(建築物の“美”に対する判断に普遍性が伴わないのも同じ理由との解釈ですが)、目的なき目的性を前提としたとしても、パリコレのデザインは“美”というよりも“衝撃性”に力点が置かれているような気がします。“美”の判断が普遍的なものであるのなら、“美”からかけ離

れているパリコレデザインはなぜ珍重され評価が高いのでしょうか。これはトマス・クーンの科学のパラダイムシフトとのアナロジーで説明ができるような気がします。人類は何事にも“変革”を求めるものであることは歴史が証明しています。同様に、ヒトは普遍的である“美”にも、新たな普遍的“美”の提案を自然と求めているのではないのでしょうか。この求める意識こそが前衛的有名デザイナーの普遍的な“美意識”ではないかと思えてきます。しかし、パリコレでの変革が、人々に長く受け入れられるべき美であることはあまりないように、私には思えます。単に私にファッションセンスがないだけなのかもしれません。

## II. 洋の美と和の美

### ■2-1. 川崎一朗→岡田:ドナルド・キーン的美意識についての質問

2023年9月17日(日) 22:51

岡田様

一つ質問させてください。

よく知られた話ですが、1950年代に当時の駐日フランス大使が「能は死ぬほど退屈だ」と言ったような俗説もあるようです。

でも、ドナルド・キーンは『日本人の美意識』の中で、「能は最高の舞台芸術」という主旨のことを言っています。

この違いは何を意味するのでしょうか？

川崎

### ■2-2. 岡田→川崎:ドナルド・キーンに関する質問(川崎■2-1.)への回答

2023年9月19日(火) 17:13

川崎先生

質問を有り難うございます。

難しい質問ですね。

私が思うに、川崎先生は、ご自分なりの解答をお持ちになっていて、あえて私に質問という形で、ぶつけてきたのではないのでしょうか。なんかそのような気が致しました。先生のご見解も伺いたいと思います。

私も、ドナルド・キーンは大好きで、彼の著作は日本人以上に日本文学や文化を分かりやすく解釈してくれているので、結構読んでいます。

○百代の過客

○日本文学史(古代・中世編)

○二つの祖国に生きて

○ドナルド・キーン自伝

○作家の日記を読む 日本人の戦争

○能・文楽・歌舞伎

(ちなみに、ピーター・バラカンも好きです。)

しかし、川崎先生ご指定の「日本人の美意識」は、読んでおりません(謝)。

なので、薄い解釈しかできず、また論点を外しているかもしれません。

以下、私の独りよがりの解釈です。

ドナルド・キーンが一貫しているのは、日本語の持つ曖昧さ(主語の省略、客体(目的語)と主体の入れ替わり等々)が、不正確さに繋がるのではなく、解釈の自由を与えているとポジティブに捉え、それが許される言語は同一民族が使う日本語であり、多民族国家ではあり得ないという主張でしょうか。同一民族であるから、解釈の幅はある一定の中に収まっており、またそれを伝え聞いた人なり

の解釈が加わることで、発信者以上に深く、鮮やかな解釈が可能になるおもしろさがあると、日本語を高評価しています。しかし、川崎先生が本メールで取り上げているのは、日本語のことでなく、能という文化表現についてですので、これ以降はドナルド・キーンの本質と言うよりも、私の能文化の解釈といった方がよいかも知れません。私は、恥ずかしながら、能は一度しか鑑賞したことがなく、何の予備知識もなく市川海老蔵の三升先代萩公演を見ました。印象は、演題が新作と言うこともあり、日本の古典芸術というより芸能に近い感覚で見えていました。その印象を基にするなら、能の本質を理解しているかどうか、評価に大きく影響しているのではないかと、ということです。はじめて能に接したフランス使節団の人たち(と理解したのですが、能を熟知していたのであれば、以下の論議は無効です)が、能に関する解説があったとしても、その能が演じる背景の事柄や様式を理解しているとは思えません。解釈の浅さが、退屈と判断した要因ではないでしょうか。すべてをミステリー小説のネタバレのように疑問とその解答が対比させられないと、フランス使節団の人たちにとっては一切が意味不明の物語が能であったのではないのでしょうか。そこを理解できるドナルド・キーンと使節団とは自ずと能文化を楽しむ審美眼が異なりますし、評価も違ってくるのではないのでしょうか。しかし、ドナルド・キーンは『日本人の美意識』の中でドナルド・キーン自体の解釈力で能文化を語っていたのでしょうか。それとも、能の文化的背景を知らないフランス使節団のような観客が見ても、それを最高芸術と判断されるだけの何かしらのものを能は備えていると言っているのでしょうか。そこは、彼の著作を実際に読んでみないと分からないので、後の話とさせていただきます。

岡田成幸

### ■2-3. 川崎→岡田:西欧人と日本人の美のとらえ方の違いについて

2023年9月20日(水) 8:59

岡田様

いつかは忘れたのですが、以前の富樫セミナーで「西洋哲学で未来は拓けるのか?」とつぶやかれたことがあると思うのです。そういう方向での美についての考察も含まれるのかなと思っていたら無かったので、条件反射的にあのようなメールを送ってしまいました。それにも変わらず、真剣にレスポンスして頂き、有り難うございました。

いずれこれにせよ、岡田さんの考察が周辺の方々を encourage しているのを拝見して、いつもすごいことだと尊敬しています。

ところで、前々回の彫刻に関する私の質問に対する熊沢さんのコメントや岡田さんのメールなどから、ヨーロッパ中心史観あるいはヨーロッパ中心文明観では「理解する」、「理解できる」ことに快さ、美を感じ、日本人は「想像力をかき立てる」、「想像力をかき立てられる」ことに喜びや美を感じるのではないかと気がしてきました。こういう考えはいかがでしょうか。

川崎一朗

### ■2-4. 岡田→川崎:工学的観点からの建築の実空間と聖空間に見る美意識

2023年9月20日(水) 15:03

川崎先生

返信メール有り難うございました。

深遠な意図をはらんだ質問だったのですね。そこまでは読み解けませんでした。

まず、私の川崎先生への前回答メールに誤りがありましたので、訂正させていただきます。

「私は、恥ずかしながら、能は一度しか鑑賞したことがなく、何の予備知識もなく市川海老蔵の三升先代萩公演を見ました。」と書きましたが、これは能ではなく、歌舞伎でした。能は、人間の心の動きをゆったりとした「時の動き」の中で幽玄世界として様式表現する、まさしく芸術です。歌舞伎は日本芸能に違いはないのですが、もう少し分かりやすい庶民的な滑稽さが動きに感じられます。優劣はないのですが、日本人であれば、美は能の方により強く感じると思います。

さて川崎先生からご指摘を受けたかつての私の発言「西洋哲学で未来は拓けるのか?」との問題意識の中で「美」はどのように考察されるのか、との質問と理解し直し、以下考えてみます

私の「西洋哲学で未来は拓けるのか?」との疑問は、熊澤先生へ発した問いでした。研究談話会における熊澤先生の第1回目のレクチャーは2020年度第7回会議(11/9)でした。その中で熊澤先生はアリストテレスから始まり、「自然のメカニズムの大元には産出性という神の存在」について語られていたので、熊澤先生が西洋哲学の泰斗であると理解し、私の西洋哲学に対する疑問をぶつけ、そこから熊澤先生とのメールによる往復対論が始まりました。議論の主題は「人為的要因による自然災害の防止に向けた技術・社会のあり方」なので、美について論じてはおりませんので、少し長くなりますが、当時の私が熊澤先生に投げかけた疑問を再度掲げてみます:

熊澤先生の一つの結論として、自然のメカニズムは「産出性」にあるということでした。自然が変化することはその産出性故であるのは理解できます。しかし物理学で言うエントロピー増大の法則から、その自然の変化も将来的にはカオス的に希釈化するであろうと予測され、産出性はその経過上の話とも理解されます。その希釈世界も産出の一形態なのではないでしょうか。

さらに熊澤先生の論は西洋哲学が基盤にあると思われます。自然のメカニズムの大元に産出の「神」の存在があり、人間の思考能力(悟性)では自然の模倣を超えることは出来ない、すなわち神が創造するものを超えた創造物(創造世界)は人間には思考不可能であり、人間が神を超えることは出来ない。すなわち人間の悟性には限界がある、と言うものであったかと思います(間違った解釈であったなら、ごめんなさい)。ここから導き出される結論は、よって、人為災害を克服する術はない。災害を受け入れる覚悟が必要と言うことでしょうか。私もリスクは人間の存在と共に存在するものとの理解なので、人間が災害を克服することは原理的に不可能との立場をとってはいます。しかしその条件の中で、どうもがき新たな術を探し提案していくか、その悪あがきの方法論を探してみたいという気持ちでいます。西洋哲学的に、仮に人間が神を超えられないのであれば、次にどのようなベクトルを求め人間は活動すべきなのか、西洋哲学はその答えを与えてくれるものなのではないでしょうか。東洋哲学は、神の存在を明示的には示しておらず、自然の一形態として人間も捉えようとしています。そこにヒントはないでしょうか。

(「自然科学を超えて:人為的要因で発露する自然災害を哲学的に論考する意義 富樫豊主催による研究懇談会における思想的交流を通じた人間存在の諸相に関する省察(1)」, p.5 右)

このぶしつけな質問に対して、熊澤先生から丁寧な回答書を頂きました。要は、先生は西洋哲学信奉者ではないこと、むしろキリスト教に根ざした西洋哲学を展開しつつ、同じ根を持つ科学技術進歩史観の危険性について論を張っています。このやりとりは、第二期の富樫報告書<sup>脚註1)</sup>に掲載されていますので興

味があれば、そちらをご覧ください。

熊澤先生は、先日の研究談話会の中でも発言されていましたが、ウィトルウィウスの書にあるローマ時代の建築要素「強用美」を“実”の世界と位置づけ、これのみで建築世界を語るのではなく、“虚”の世界も意識して論じるべきとして強用美に加え“聖”を要素に加える提言をしています。川崎先生が言われる「ヨーロッパ中心文明観では「理解する」、「理解できる」ことに快さ、美を感じ」というのは、まさに建築を“実”の世界でのみ捉え理解することと同意のように思います。しかし建築を“実空間”そのもので理解するのではなく、“建築する”という動詞としての意義もあり、その場合、建築された空間に祭事性や神秘性という“虚”をまとうせることも可能となります。強用美が実世界のことであるなら、そこで語られる“美”は言葉にできる“実体的美”に限定されており、それでは不満足な熊澤先生が“聖”という虚空間の属性を提言したのではないのでしょうか(熊澤先生へ:私の理解が間違っていたら、修正ください)。私は、その“聖”には言葉にできない“美”も含まれていると感じます。単なる実の空間を論じるのではなく、あるべき空間・ありたい空間・むしろ空間を外しての問い・論・倫理の追求なる行為・意識が“聖”に宿る美と表現しても良いかもしれません。当初熊澤先生に質問した「西洋哲学で未来は拓けるのか?」の質問に含まれる未来とは、このままでは人為的災害に侵される未来のことであり、その未来を西洋哲学で救うことはできるのか? という意図を持った質問でした。今回の議論に繋がる質問に変えるなら、「西洋哲学で人為的災害を止めようとする美しい動機を、世界に発動させることは可能なのか? 科学的合理性を重視する欧米人に西洋哲学で理解させることは可能なのか?」となるかもしれません。

私は工学出身のため、科学技術は止めようのないベクトルを持っているとの立場です(この意見に議論百出かもしれませんが、論を進めます)。その依存性(すなわち科学技術に対する依存性)に関してはユンガーが、その危険性についてはアーレントが指摘しています。そのとおりなのですが、科学技術は人類を滅亡に導く同一方向を向いた歩み、すなわち“進歩”ではなく、変革(パラダイムシフト)を伴う全く方向性の異なる突然変異的“進化”により、突き進むことに期待しています。その変革は、実の世界の理解の道を歩み続ける西洋技術史観に依るのではなく、“虚の世界”をさまよひ歩くことにより新しい道德観・倫理観が発揚し、それに伴って科学技術の発展の方向性の舵取り変化が生まれるのではとの期待です。これは川崎先生が指摘された「日本人は「想像力をかき立てる」、「想像力をかき立てられる」ことに喜びや美を感じるのではないか」という気がしてきました」と同意ではないでしょうか。突然変異的ひらめきは理解とは異なる思考パターンです。神は一神であるとし一つの真実を追い求めそこに辿り着いた(=理解した)喜びよりも、想像の中でひらめく新たな道を発見したとき感じる喜びに日本人はより強い感情を持つのかもしれません。一神を存在させない東洋哲学には、あらゆる方向に道理がある。世界を救う思考法は西洋よりも東洋にあるのかもしれません。これを追い求める意識が“美(美意識)”であり、仮に間違っただけを進んだとしても、そこに執着せず別の理を求める柔軟性が“美”なのかと、今日のところの結論とさせていただきます。

脚註 i ]:岡田・熊澤:7B. 哲学論議「人間と社会」、岡田氏 vs 熊澤氏、日本建築学会 人為的要因による震災の防止に向けた技術・社会のあり方について(第二次)報告書、202-219、2022年3月。

## ■2-5. 川崎→岡田:総括返信 2023年9月21日(木) 8:48

岡田様

添付ファイル(岡田■2-4.)を拝読して、自分は岡田さんと熊澤さんの言われたことや書かれたことの表面的なことにしか気付いていなかったことを自覚しました。お詫び申し上げます。

西洋中心史観や西洋中心哲学と異なる道を探したいと思っても、西洋中心史観や西洋中心哲学は余りにも巨大で、ある意味で余りにも魅力的なので、とりあえずは、西洋中心史観や西洋中心哲学の書籍や用語に頼らざるを得ないんだと認識しました。

川崎一朗

## ■2-6. 岡田→川崎、熊澤、外岡、富樫:補足

2023年9月21日(木) 11:08

川崎先生、熊澤先生、外岡先生、富樫先生

CC.皆さま

返信有り難うございます。

先生の文面(川崎■2-5.)に「お詫び」の言葉がありました。恐縮至極です。

お詫びされることは何もなく、むしろ、川崎先生のお考えに私の思いの近さを感じ、うれしくなり前メールを差し上げた次第です。

前メール(岡田■2-4.)には、工学者としての私の立場も記載させて頂いています。それが、私が「実存主義から導かれるニヒリズム」を嫌う理由です。

人類の未来は結局は何も生み出さない“滅”に向かっているのかもしれませんが、それをゴールにしてしまつては、何とむなしいことでしょう(注釈をつけるなら、実存主義は絶滅をゴールとはしておらず、ニーチェなどはそれから逃れる術を展開していますが、理解の薄い私には、それが刹那的術にしか見えてきません。これについての反論をどこかの機会で、熊澤先生に私にも理解ができる言葉でやさしい解釈をお願いしたいです)。

私は、仮に人類は“滅”に向かう道が避けられないことだとしても、何か悪あがきでも良いので、未来に“美”を求め続けたいし、人類は求めているのだと思います。外岡先生から「岡田も意外とニヒリズムだ」と言われ、そう思われる理由が自分にはよく分からないので戸惑いを覚えたことを思い出しました。

川崎先生からのメールにお答えする形で、返す刀であらぬ方向に斬りかかってしまいました。

お許ください。これも研究談話会の賞賛すべき「ゆるさ」故であり、富樫先生、許して頂けますよね。

岡田成幸

## Ⅲ. 芸術学からみた「美」

### ■3-1. 橘美知子→岡田:岡田の「美」について(岡田■1.)への感想

2023年9月18日(月) 15:56

岡田先生の「美に関する私的考察」(岡田■1.)拝読いたしました。

回復に専念しておりましたが、勇気付けられました。

ファッションショーの動機は自己顕示性、美とは異なると存じます。

ホモ・サピエンスがネアンデルタールとの共存において勝者となった原因。

前頭前野のおかげで生き残ったサピエンス

サピエンスの美の認識力は武器だった。象徴的価値を伝える能力があった。

(最近の脳科学の情報です)

人類が共有できる価値が美なのでしょう。

イザベラがアルハンブラを壊さなかった、壊せなかった理由

美意識の共鳴

美はバランスとハーモニーの両方揃わないとダメな理由が脳の構造から解明される時代に居合わせたことを喜んでおります。

芸術領域では、美的体験を自己発見・自己実現の契機として重要視します。

関西の大学院生が「この国は恨みツラミ僻みの国ですからねー」と言っていたが、美意識＝センサーさえ機能すれば、自己発見、自己実現の道が開けます。

人が無意識の部分をフィードバックできたら、次のヒントが現れてくれて、それなりに納得できる道が開けるというのが発想法を提唱したアリストテレスの意図だったとしたら？

断片にとらめっこするのは、意識を初期化するから、行き詰まりにならないというのが「水に流す」の極意だということに気がついてよかった！

脳は感覚世界に属するもの。自然は感覚によってしか根本的には捉えられない。

美＝出会体験現象とするなら、シラーが遊戯衝動という言葉に美を留め置いた訳がわかるような気がします。

『抽象と感情移入(東洋芸術と西洋芸術)』ヴォリナーの著書、岡田先生のお役に立てばと

### ■3-2. 岡田→橘:「美」による幸福感

2023年9月19日(火) 17:53

橘先生

コメント並びに推薦図書の紹介、有り難うございます。

ファッションデザイナーは、美よりも自己顕示性が優先しているのご指摘は、納得しました。

ホモ・サピエンスが抽象的ナラティブを、同種間で共有できる能力を身につけたから、圧倒的組織力を発動できるようになった、との指摘はユヴァル・ノア・ハラリの人類の認知革命としても知られています。この能力は、何がもたらすものなのでしょうか。

近年の脳科学によると、動物が本来持っている本能(ある行動を活性化させる)のは、三大脳内ホルモン(精神を安定させて幸福感を感じさせるセロトニン、集中力や気持ちをポジティブにさせるオキシトシン、快感を感じさせるドーパミン)これらは中脳深部から生成されるもの、すなわち五感が活動したときに放出されるものなのですが、人類は大脳皮質からも多量に発せられるようです。大脳思考により幸福感・やる気・快感を強烈に感じるようになった動物、つまりは意識すること(好奇心や問題発見)が止まらない動物のようです。

同じように、美を体験し感じる普遍的幸福感・快楽も、大脳皮質を活動させることで同様の感覚を得ることができるようになるなら(あるいはすでにしているのかもしれませんが)、想像による美の創造・美の抽象化・美のステップアップ(美 2.0 とでもいうようなもの)があるアルゴリズムの下で起こりえるのかもしれませんが。橘先生が言われる「人が無意識の部分をフィードバックできたら、…、それなりの道が開けるというのが、アリストテレスの意図だったとしたら」というのは、そういうことを言っているのでしょうか。もしそうであるなら、私の前レポートで「美は言葉にならない求め続ける意識」ではないかと結論づけましたが、次なる世代において、美もアルゴリズム化されてしまうかもしれません。

岡田成幸

## IV. 美の様々な形態についての議論

### ■4-1. 熊澤栄二→岡田:岡田の「美」について(岡田■1.)へのコメント

2023年9月21日(木) 8:48

岡田先生へ 富樫研究会各位へ

メールでは、もろもろ拝読させて頂いておりましたが、なかなかまとまった時間が取れず、失礼いたしました。熊澤です。

幾つかウイトルウィウスのことでも補足したこと、またいくつか岡田先生よりご質問を頂いたことについて、回答を pdf にまとめました。

来週より(9/25-9/28)、海外出張でバタついておりますが、本日を逃すとさらに二週間ほどお返事が伸びそうでしたので、まとまらないことを覚悟で1/3ほどを pdf にて形にしてみました。

pdf ファイルのタイトルに「...熊澤批判 1.pdf」とつけていますが、非難ではありません。

批判 critical: judging / able to discern という意味ですので誤解が無きようお願いいたします。

### 「美に関する私的考察」について その1—古代建築の美

まずは Marcus Vitruvius の *De architectura libri decem* 『ウイトルウィウス建築書』(森田慶一 訳註, 東海大学出版会, 昭和44年3月。以下、建築書)から有名な強さ、用、美の理を示す件を改めて紹介します。

Hanc autem ita fieri debent ut habeatur ratio firmitatis utilitatis venustatis.

(LIB. I, iii, 2)

これらは、また、強さと用と美の理が保たれるようになさるべきである。

(第一書 第3章2)

これに続き、ウイトルウィウスは次のように、三つの理がどのように建物に保たれるべきかを説明しています。

強さの理は、基礎が堅固な地盤まで掘り下げられ、材料の中から惜しげもなく十分な量が注意深く選ばれている場合に保たれ、用の理は、場が欠陥なく使用上支障なく配置され、その場がそれぞれの種類に応じて方位に叶い工合よく配分されている場合に保たれ、美の理は、実に、建物の外観が好ましく優雅であり、かつ肢体の寸法関係が正しいシュムメトリアの理論をもっている場合に保たれるであろう。

(同上書)

強さ: *firmitas* について。森田も基本的には「言うまでもなく、強さの理は構造学に属し」『建築論』, p.173, 東海大学出版会, 昭和53年2月)と解説しています。今現在、調べる暇は持ち合わせていませんが、構造力学ではなく飽くまでも「構造学」と記したことは意味深長です。建築書を通読すると、いわゆる *firmitas* の理は構法と言っても過言ではありません。なお管見の及ぶ限り建築書を調べてみても、力の概念が記されていたのは、わずかに2カ所でした。「私的な建物の使い勝手とそのシュムメトリアを論述」したとする第6書に、力の概念について興味深い件がありました。

家の地面より上部にある部分は、もしわれわれが前の巻で城壁や劇場について述べた通りにそれぞれの基礎が造られているならば、それは疑

いなく長年に亙って堅固であるだろう。…また、壁や角柱や円柱は、その堅固さに相応するように、下部構造の中心に鉛直に配置されるであろう。なぜならば、もし壁や柱の荷が宙ぶらりであるとすれば、持久的な強さを持ちえないから。

(第六書 第8章1。下線部は引用者による)

また同章において基礎構造(地下構造)を説明した件では、

そしてこれの中央から主壁の隅角へそれを結びつける壁が配置される。こうして、この鋸歯状の壁と対角線状の壁はあらゆる力に主壁を圧することを許さず、埋戻しの圧力を受けて散らすであろう。

(第六書 第8章7。下線部は引用者による)

この記述以外、力の概念をついぞ見つけることができませんでした。構造についても、躯体が(シュムメトリアの原理を踏まえて)適切に配置されていることが、構造物の堅固さ・持久性を担保していると理解することは許されそうです。

ウイトルウィウスの報告によると、ギリシア人はシュムメトリアを主要な根拠として各部位の比例—これは量的な均衡だけでなく、質的な均衡も含む—を都度、(諸様式として)規定したようです。

実に、かれらはすべてのものを、確かな固有の性質と自然の真実から導かれた習慣に従って、建築の制作に移した;そしてその説明が議論において真理に適うようなものを是認した。こうして、かれらはその由来によって定められたそれぞれの様式のシュムメトリアと比例を後世に残した。わたくしは、かれらが開いて置いてくれた道筋をたどって、イオーニア式とコリントゥス式の慣例について上に述べたが、こんどはドーリス式の割付けとそれの全体の姿を簡単に示そう。

(第四書 第3章6。下線部は引用者による)

従って、森田はギリシア人の建築観として、以下のようにまとめを示しています。

理性的なギリシア人は、あらゆる存在物の形をいつも明確に眼にとらえ、その中に秩序原理の支配する調和を感受し理解した。彼らは、眼に見える物象を調和ある形態として意識にのぼらせ、あらゆる作品をこの宇宙秩序に参与する一つの物象として制作しようとした。建築もこの例に漏れない。ギリシア人は、何よりもまずシュムメトリアの原理を通じて建築の形を理解し、シュムメトリアの原理に則って建築を制作した。建築は、この原理を保有することによって、造物神の作品—天井の星、地上の自然、とりわけ美しい人間の肉体—と係わり合うことができると考えた。まことに理性が支配する主知主義的建築観である。

調和的に形を整えること、それは空間構成を人間の眼で受けとめ得る限りにおいて幾何学の簡明な命題に従わせることであった。甘く美しい形が求められるのではなく、厳しい整った形が求められたのである。

(『建築論』, p.171, 東海大学出版会「東海選書」, 1978年。

以下、建築論とする)

ウイトルウィウスの報告を基に、そして翻訳者でもある森田の言葉を介して、ギリシア的な建築観は現代を生きるわれわれにも触れることができます。今回、用の問題は長大になり過ぎるため考察は割愛しました。基本は用の問題にも、

場所の配分の術として「シュムメトリアの原理」が貫かれていたことは強調しておきます。数的な比例関係(量的な均衡)というよりは、優美さ、威厳などの建築の相貌と諸場所の性質とのシュムメトリアを用 *utilitas* として、言い換えれば、質的な均衡の問題として、ウイトルウィウスは論じています。あんちよこの誹りを厭わず、更に森田の用についてのまとめを以下に紹介します。

建築造形を外から秩序づけるものとしてはいろいろなもの、たとえば敷地・材料・構造法・用途・風土・風俗・習慣など、が考えられる。それらのうちギリシア人が早くから関心をもって採りあげていたのは建築の用途すなわち効用性であった。ギリシア人は、建築造形に「用に即する」秩序を問題とした。この用に即する秩序の原理は *kosmos* という語で言いあらわされていたと言ってよい。コスモスは、タクシスと共に、ふつう秩序一般を意味するがプラトンが「*taxis* と *kosmos* をもって造られた家は有用 *khreos* であり、無秩序な家は悪である」(Gorgias, 504a)という場合、このコスモスは明らかに用に即する秩序と考えるべきであろう。

(建築論, p.169。下線部は引用者による)

さて、岡田先生が「熊澤先生はローマ人の美的感覚をバランスで説明されていましたが、ではなぜバランスの良いものが美しいと感じるのか(中略)、そして建築物には *Venustatis* (美)がなぜ必要なのかについての説明がなかったように思います。」との問いについては(I. カントの問題(後)にお答えするとして)、上のウイトルウィウスの建築理論(もしくはギリシア建築理論)を踏まえて、次のお答えできると思います。

まず「バランス」という言葉は、もしかしたら敢えて分かりやすさを優先して、不用意な言葉を選んだかも知れません。どちらかというと、均衡やシュムメトリアと言うべきでできた。結論から言うと、古代には普遍的な美の概念、つまり「自律(立)的な美の概念」が存在しなかったから、ということになりそうです(やや肩透かしの恐縮です)。

冒頭に引用した建築書の一節「美の理は、実に、建物の外観が好ましく優雅であり、かつ肢体の寸法関係が正しいシュムメトリアの理論をもっている場合に保たれるであろう。」(第一書第3章2)にも表れているように、飽くまでもシュムメトリアの理論がその建築物に実現されている限りにおいて、美の理が保たれているのです。古代人たちは、シュムメトリアが支配する物象を「美」として言表したことは間違いのないと思います。例えば、次のような逆命題を作ってみましょう。

命題 a: シュムメトリアが支配するものは、美の理が保たれている。

命題 b: 美の理が保たれているものは、シュムメトリアが支配している。

古代ギリシア・ローマ時代であれば、命題 a および命題 b は等しく成り立つでしょう。古代人にとってシュムメトリアで支配されていることと美の理が保たれていることは同義(むしろ定義)だったとも言えそうです。古代人の理解からすると、「なぜバランスが良いものが美しいと感じられないのか」と現代人は揶揄されそうです(補遺参照)。

従って、カントの美の議論からすると、古代の美の議論は、自由美: *pulchritudo vage* ではなく、付備美: *pulchritudo adhaerens* だと思っています。

つまり、古代ギリシア・ローマ世界では、強さ・用・美という概念が自律した普遍性を確保し得たということは過度な判断だと言わざるを得ません。飽くまでも、シュムメトリアなどを代表とする比例的秩序(アナログア)が隅々までいき互った

世界、あるいは秩序づけられたものによりポリス社会そのものが自足し得る状態となっている状態こそが、善であり、この限りで(つまり結果として)、建築物などの物象を「美」と古代人が捉えた可能性は高いと言えます。

令和5年9月21日 熊澤 栄二

#### 【補遺】

古代的な美について。現代でこそ、無秩序なものにも「美」を感じるという感性論で論難するでしょうが、これは世界的にも、カントの美論を敷衍した結果起こった、近代的なパラダイム変革の一例でしょう。倫理的な観点からしても、個人の嗜好性による「美」という概念、極端な話になりますが現代人における偏執的な嗜好性を「美」と捉える態度は、どの民族であっても歴史上皆無だったと思います(現代では、paranoia 的な幻想が「美」や「芸術」として受容されています)。このような唯美的、耽美的な価値観は、19世紀のロマン主義以降のかなり新しい概念です。マスコミの扇動や政治的プロパガンダの影響を除いて、果たして非-秩序的なものに「美」を認めるのを是とすべきでしょうか。

幻想、耽美主義を貫いた澁澤龍彦は、遺作となった『高岳親王航海記』の一節で、彼の美についての思いを、登場人物の円覚の台詞に託して綴っています。

わたしたちは見かけの美しさに目をくらまされているけども、要するに真珠というものは貝にとっての病気にはかならないのですね。病める貝の吐き出した美しい異物、それが真珠です。そういえば修行中の釈尊を誘惑せんとした悪魔のむれも、美しい見かけの下に病めるころを隠していたのではなかったのでしょうか。病気だから美しいのか、美しいから病気なのかはよく存じませぬが、この二つがどうやら相関関係を有しているのはまぎれもない事実のようで、

『高岳親王航海記』/「真珠」,p.190, 文春文庫 448, 平成2年10月/初出  
『文学会』, 昭和62年3月号)

現代では、病的なものにも美を感じる美的な意識は肯定されています。デカダンスの巨匠オスカー・ワイルドの『トリアン・グレイの肖像』にも、頹廢的な美の概念が肯定されています(個人的には、澁澤もワイルドも共感していますが...)。戯曲の『サロメ』(1891年)となると、オーブリー・ビアズリーのセンセーショナルな挿絵も相まって、社会問題にもなりました。

これも、近代において、美そのものの自律の極端な事例ではないかと考えています。

#### ■4-2. 岡田→熊澤:古代建築の美 に対する質問並びに若干の考察

2023年9月23日(土) 11:49

熊澤先生

海外出張準備のお忙しい中で、回答にお時間を割かせてしまい恐縮です。

宛先にお名前を入れたため、回答を急かしてしまったのではと、配慮を欠くメールで申し訳ありませんでした。それにもかかわらず、丁寧にご回答頂き有り難うございます。

当方、現役を退いているため、時間には多少余裕があるので勝手に対論を進めさせて頂いておりますが、熊澤先生の本業に差し支えないよう適当にあしらって頂いて結構ですので、無理のない時間の中でお読み頂けると幸いです。

ファイルを添付します。

岡田成幸

9月22日配信の熊澤先生レポート:

#### 「美に関する私的考察」について その1—古代建築の美 に対する質問並びに若干の考察

以下、先生からの「その1—古代建築の美」に関する解説書で触発されたことをしたためます(文中の【p.○ 左/右】は、本論文内における引用もしくは参照した記述の該当ページ数と左もしくは右のコラムの区別を意味しています)。

まず、先生からのメールの中に、当方にとり、聞き慣れない語がありましたので、確認しておきます。

- 1)【p.70 左】シムメトリアの理論:数学的幾何学で使う対称性のことと理解しました。いわゆる、点対称や線対称を意味する語。シンメトリーの語源。
- 2)【ibid. 右】バランスと均衡の違い:国語事典では、バランスとは均衡のこと、均衡とはバランスのこと同意語として扱っていますが、LONGMAN の英英辞典(4訂版)では、balance は「To be equal in importance, amount, value, or effect to something that has the opposite effect」とありますので、対立する事物を1:1で扱うことに加え、可算的な量や値の釣り合いのみならず、不可算的な判断などの調和も含意しています。本文中で熊澤先生が「(ローマ時代の)“美”をバランスではなく、均衡と表現した方がよかった」と記述しているのは、量的に等しく扱うことよりも相似性に力点を置きたかったこと、そして恐らく均衡には可算的釣り合いのみ、バランスには可算・不可算の両方の釣り合いを意味するとの解釈をしているので、ローマ時代の“美”は「目に見えるものの比例関係を重視していた」と言いたかったのではないかと理解しました。ここに間違いはないでしょうか。
- 3)【ibid. 右】自律(立)的な美の概念:前後の文脈からここで使われた「自律」は「普遍的」の意味が込められているようなのですが、自律の対語は他律であり、他律こそが他者(神)からのルールに影響されるという意味であり、西洋人にとっては神から与えられたルールこそが普遍性を意味するのではないかと、思ったのですが間違いでしょうか。

【p.71 左】近代における美の意識に、病める美や退廢的な美も肯定する傾向にあることを、熊澤先生は「これも、近代において、美そのものの自律の極端な事例ではないかと考えています。」と考察されていますが、ここで言われている「自律」は他者に影響されない自分自身の考えという意味に捉えることができます。そうすると、自律=普遍という式は崩れてくる気がします。熊澤先生が使われた「自律」を解説して頂けないでしょうか。「自律」はカントも使っている重要哲学語の一つだと思いますので、よろしく願います(もちろん、先生が時間的余裕のあるときに結構です)。

このような理解の下で、熊澤先生の古代建築の美について、解釈を進めます。

歴史的に見て、ギリシャ・ローマ時代においては、シムメトリア(数学的幾何学で言う対称性)に“美”を認識し、抽象的“美”はカント以後であるとの説明は、了解しました。ウィトルウィウスの建築書の記述には、造形物の話しか出てこないのであれば、抽象性や普遍性は後生話であり、そのとおりだと思います。私が記載した“美”の普遍性はローマ時代においてすでに証明されていたのではないかと、という考察は、現代文化に触れている者だから言える“時代を先取りしたかのごとく戯言”なのでしょう。

ローマ時代における解釈は史実として認めますが、ウィトルウィウス建築書の「強さ・用・美」の現代的解釈として、すなわち現代における建築観として建築物の要素を「強さ・用・美」になぞらえ語るとするなら「美」は建築の果実としての建造物に加え、建築の思索行為にも表出する概念」と捉えることは、今や普

通のこのような気がします。今思えば、前回の私のレポート「美に関する私的考察」はそのような立場からの物言いでした。

しかし私は“美”に加えて、“Firmitas 強さ”についてはその汎用性・普遍性を森田訳「ウィトルウィウス建築書」の熊澤先生の解説【p. 70 左】から強く感じました。以下の部分です。

構造についても、躯体が(シュムメトリアの原理を踏まえて)適切に配置されていることが、構造物の堅固さ・持久性を担保していると理解することは許されそうです。

ここから私が感じたことは、建造物の“強さ”を獲得するためにシュムメトリアの原理を踏まえたこと自体が、“強さ”の普遍性を追い求める姿に違いなく、単に数学的幾何学の理解にとどまっていなような感じを受けたということです。

ウィトルウィウスが“Firmitas 強さ”の説明において頻出する“比例”とは、シュムメトリアの原理で説明される点対称・線対称を一般には意味しますが、私はむしろ物理学で言うところの“対称性”を意味しているのではないかと感じました。物理学で言う対称性とは、座標系に関わらず力学的性質(法則)が保たれることを意味します。座標系に関わらずというのは、どの世界においても普遍的に成立すると言うことです(たとえば、地球上で成立する物理法則は、宇宙の果てでも成立すると言うこと)。故に、建造物を建てる“構法”すなわち、このやり方をすれば、誰でも何処でも“強さ”を保有した建造物ができる方法としてローマ人は記述したのではないのでしょうか。これも、現代人故の概念の過度拡張でしょうか。

私が、ウィトルウィウスの言うところの“Venustatis 美”に、時間要素を嗅ぎ取り、“美”の普遍性を語ったのは、熊澤先生が“Firmitas 強さ”について森田氏を引用しつつ説明されている「持久的強さ」でさらに強化されました。建造物が強さ・用・美をそれぞれ独立に保有したからと言って、よい建造物にはなりません。そこには強さと用と美を兼ね備えた“バランス”が必要なわけで、ローマ人は持久的強さに裏打ちされた美を求めていたはずだと思うのは、これもまた後生の者だからこそその戯言になるのでしょうか。現代の我々が 1000 年以上を経て外観が大きく変わった神殿や神社仏閣を見ても、そこに歴史という美しさを感じるのとは、当時の建造者達には想像できなかったことなのかもしれません。“美”の普遍性を論じるには「歴史」をそのように理解すべきなのかもしれません(その時代に時間を止めて以後の変化は考察しない)。

熊澤先生が【補遺】で述べられているように、近代は概念を過度に拡張し、ゲテモノすらそこに美を求めようとする姿勢が尊ばれる風潮にあります。先日届いた橋先生からの私へのコメントに「ファッションショーの動機は自己顕示性、美とは異なると存じます。」とありました。自己顕示できればアートの成功という構図は、アトリエ系建築でも一部に見られる現象です。街のバランスを崩す醜悪なるものが街にあふれてきては、建築要素の“快適性”・“健康性”を破壊する行為だと思います。

- ・自己顕示は美ならず。
- ・ギリシャ・ローマ時代の狭義の美(幾何学的対称性)や日本の神社仏閣に見られる様式美は、誰がなんと言おうと美しい。
- ・美を思索するには言葉(キーワード)が持つ概念を健全に進化させる必要がある。

このようなことを市民の建築リテラシーとして身につけて欲しいと思いつつ、今日のところはここまでとさせていただきます。

#### ■4-3. 熊澤→岡田:「古代建築の美」への回答と美の自律性

2023年10月9日(月) 21:11

岡田先生へ 富樫研究会のみなさま

お世話になります。熊澤です。

9 月末の台湾出張から無事帰国した後、愛息から新型コロナをもらってしまいました。

学校の職務をオンラインでやり過ごしながら何とか岡田先生からの質問の半分ぐらいについて回答をまとめましたのでご笑納くださいませ。

カント美学については、証拠が残らないように感想程度でお話しするのは良いのですが、やはり文字に残るとなると身構えてしまい、書けば書くほどゴールが遠のいてしまいます。

取り敢えず、ウィトルウィウスの報告に見られる古代ギリシアの造形の原理について、ご質問を受けた限りはお答えしたつもりではありますが、何とも覚束ない感じもしています。

お時間がある時にもお目通し頂ければ幸いです。

#### 「美に関する私的考察」について その 2—「古代建築の美」への回答と美の自律性

前回のエッセイの続きとして、岡田先生から頂いた質問への回答から記します。引き続き *De architectura libri decem* 『ウィトルウィウス建築書』、『建築書』、森田慶一『建築論』、『建築論』と表記します。

##### 1. シュムメトリアについて

小生が「先ず「バランス」という言葉は、もしかしたら取って分けやすさを優先して、不用意な言葉を選んだかも知れません。どちらかという、均衡やシュムメトリアと言うべきでできた。」(熊澤「美に関する私的考察」について その 1—古代建築の美, 【ibid. 右】。以下「古代建築の美」と記す)という指摘に対して、岡田先生は次のように解釈頂いています。

...量的に等しく扱うことよりも相似性に力点を置きたかったこと、そして恐らく均衡には可算的釣合いのみ、バランスには可算・不可算の両方の釣合いを意味するとの解釈をしているので、ローマ時代の“美”は「目に見えるものの比例関係を重視していた」と言いたかったのではないかと理解しました。ここに間違いはないでしょうか

(岡田「美に関する私的考察」について その 1—古代建築の美に対する質問並びに若干の考察, 【p.71】。以下「質問と考察」と記す)。

概ねは理解できますが、岡田先生との文言の調整が必要かと思いました。「均衡には可算的釣合いのみ、バランスには可算・不可算の両方の釣合いを意味する」との指摘ではバランスという言葉の方に可算・不可算の両方の釣合いというより広義での釣合いの意味を付託されています。

私は狭小な意匠論の世界に生きてきたため、このような捉えからもあり得るのだと、改めて認識を新たに致しました。われわれの世界でシュムメトリアを語る際には、確かに森田慶一も量的原理として位置づけているので(『建築論』 p.175)、岡田先生の指摘も尤もだと合点しています。ただし、私もあまり自覚はしていなかったのですが、シュムメトリアを語る際はバランスという一般用語を

避ける嫌いがあります。というのも、この原理で表現される配分の術、釣り合いに関する理論は、「可視的なもの」以外にも適応されるからです。

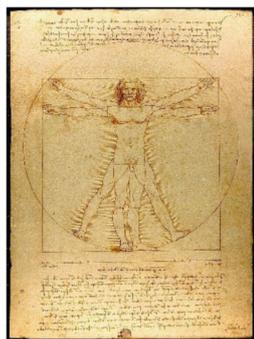
量的な釣り合いのみを表すならば、日本語では寧ろ「均整」という言葉を使うように思います。「均整の取れた顔立ち」など典型的な表現です。「欲望との均衡を保つ」や「濃味と均衡をとる」「資産ポートフォリオの均衡を重視する」などの用例は、必ずしも明確な対象となっていないような外圧や状況などの事象に対して言われます。

もう一点、こちらの指摘の方が気になりました。シュムメトリアを「数学的幾何学で使う対称性のことと理解しました。いわゆる、点対称や線対称を意味する語。シンメトリーの語源。」(「質問と考察」, [ibid.])という指摘です。建築意匠の世界でも、確かにシンメトリーは「対称性」として硬直的に理解されています。森田は「もともとギリシアのシュムメトリアは、原理であって単なる制作手段としてのカノンではなかったのであるが、ウィトルウィウスではそれがカノンの抜われ、それが後世に大きく影響してルネサンス以後シュムメトリアはカノンと同一視されるようになったのである。」(『建築論』, p.175)との指摘するように、ルネサンス以降、この「原理」を意味する概念が、極端に硬直化して「対称性」という現代の概念を惹起することになりました。

ここで興味深いのは、ウィトルウィウスですらシュムメトリアをカノン(kanōn)として(ある意味)誤読していた可能性を森田が指摘しているところです。この件からも、シュムメトリアは対称性「以上」の概念を包含していることが分かります。ところでカノンとは、もともと「規範性」や「原則性」あるいは宗教の文脈では「聖典」を意味する言葉で、当然ながら対称性の概念には、このカノンという意味は含まれません。逆に、ある種の造形の手法(カノン)として「対称性」を遵守した作品ならばルネサンス以降、いくらかでもその事例は見出すことができます。

上にも指摘した様に、原理を意味するシュムメトリアは、時代が下るにつれて「対称性」という狭義の意味に変質したと言えるでしょう(もともと原理としてのシュムメトリアの原理のニュアンスは、フランス古典主義のJ-N-L.デュランの「エコミー」の構成概念の中に形を変えて受け継がれていきます)。

それでは、ギリシア時代のシュムメトリアは、「対称性」以外、どのような意味を有していた言葉なのでしょう。レオナルド・ダ・ヴィンチの習作として有名な「ウィトルウィス的人体図」(Homo Vitruvianus, 1485-90?)は「プロポーシヨンの法則」(Canon of Proportions)あるいは「人体の調和」(Proportions of Man)と呼ばれ、Wikipediaに報告されています(この件の出典情報が無く、英語版Wikipediaの“*Vitruvian Man*”にも記載がありませんので、飽くまでも参考程度にお願いします)。この人体図の根拠となった『建築書』は、次の件からはじまります。



第一章 1 神殿の構成はシュムメトリアから定まる。この理法を建築家は十分注意深く身につけなければならぬ。これはギリシア語でアナログアといわれる比例から得られる。比例とは、あらゆる建物において肢体および全体が一定部分の度に従うことで、これらシュムメトリアの理法が生まれる。実に、シュムメトリアまたは比例を除外しては、すなわち容姿の立派な人間に似るように各肢体が正確に割付けられているのでなければ、いかなる神殿も構成の手段を持ちえない。

このシュムメトリアの神殿への具体的な適合については、第四書に詳しく報告がある。いわゆるドリス式の起源を説明した件となり興味深く、以下二節分にわたり引用します。

5 これらの都市は、カーリア人とレゲース族を追い払ったとき、この地方を彼らの首長イーオーから(名を)採ってイーオーニアと呼び、そこに不死の神々の聖域を定めて神殿を建て始めた。まず最初にアッポロー=パニオーニウスにアカーイアに見るような神殿を建て、それをドーリス式と呼んだ。なぜなら、かれらは初めてこの様式で造られた堂をドーリス人の都市で見たからである。

6 かれらがこの神殿に柱を据えようと思った時、そのシュムメトリアを持たなかったので、荷を負うに適しかつみたところも是認される美しさをもつためにはどんな割付でそれを造り上げることができるかを探索して、男子の足跡を測ってそれを身長に当てはめた。男子では身長のお六分の一であることを見出したから、かれらは同じことを柱に移し、そして柱身の下部をどんな太さにしようとも、その六倍だけを柱頭も含めた高さを持って行った。こうして、ドーリス式の柱がはじめて男子の身長のプロポーションと強さを建物にもたらした。

(第四書 第1章5,6 ただし、下線部は引用者による)

シュムメトリアは上の引用からも分かるように、各部位の「割付比例全体の体系」というものであり、敢えて比較するならば日本の「木割」やその配りつけ垂木のルールを決定した「支割」の概念に最も近いものです。日本の支割も意匠のカノンにして、構造のカノンであります(因みに、日本建築では中世を通じて定式化されるに従い、徹底的に構造と意匠の乖離(枯木にみる野小屋の発展)が進み「表現」として木割が変容していきます)。

ギリシア時代では、それ故、前稿にも引用しましたが、森田は「建築は、この原理を保有することによって、造物神の作品—天井の星、地上の自然、とりわけ美しい人間の肉体—と係わり合うことができると考えた」(建築論, p.171)と喝破している訳です。

さて、この引用箇所は、偶然にもシュムメトリアの文脈において美と強さの概念にも触れており興味深いところですが、誤解を恐れずこの件を言い換えてみると、建物の荷重を担うための強さの根拠は、成年男子の人体の屈強さとのアナログアから由来しています。成年男子の人体の比例を神殿のプロポーシヨンに適合させることで、神殿にそれに相応しい荷を負わせるだけの強さが得られます。また同時に、この人体は神とのアナログアを有する美を体現させるために、神殿のプロポーシヨンに適合させることを以て、人体のもつ美を神殿に獲得せしめんとするロジックです。つまり、荷に耐える「強さ」のシュムメトリア、人体の「美」のシュムメトリアのように、建築の肢体全体の割付の比例の体系のことをシュムメトリアとしてギリシア人は理解していたようです。従って、このシュムメトリアは、往々にして各様式のカノンとして後世に伝えられたとしても、さほど訝しい話ではありません。

ウィトルウィウスも、比率として詳細に各様式のシュムメトリアを記述することで、カノン化する、誤解されることを恐れていたかも知れません。ですので、第一書、三書にはその原理的な側面を強調して報告しています。

以上の話をもとに、「ローマ時代の“美”は「目に見えるものの比例関係を重視していた」という岡田先生の指摘を検討すると、ズレを感じざるを得ません。

確かに「目に見えるものの比例関係を重視していた」という件は、肯ずることができません。しかし天界、自然世界、自然物、人体にとどまらず、都市国家にもシュムメリアの原理が働いていたと思います。となると、可視域以外にもギリシア人は比例的秩序を認めるでしょう(音の世界。特に『建築書』第五書第3章の音のハーモニアと劇場のシュムメリアの関係について)。

ギリシア人が、「美」という単独の価値観を有していたとは考えにくく、宇宙全体との比例的なつながりを感じることで初めて「美」が問題になるのであり(美は従属的な問題)、近現代のように自律的な「美」、あるいは「美そのもの」という概念を認めることは、管見が及ぶ限りでは難しいと感じています。

「3」[p.3]自律(立)的な美の概念については、また大幅な紙幅を割く話なので、また別に回答の機会とする旨お願いします。

なお「【最終ページ、最終行】近代における美の意識に、病める美や退廃的美も肯定する傾向にあることを、熊澤先生は「これも、近代において、美そのものの自律の極端な事例ではないかと考えています。」と考察されていますが、ここで言われている「自律」は他者に影響されない自分自身の考えという意味に捉えることができます。そうすると、自律＝普遍という式は崩れてくる気がします。」について、まとめようとしていた内容を(私よりもはるかに)手際よく、まとめられていた論考を偶然、netを渉猟している際に見つけましたので、そこから抜粋したいと思います。

松本誠一郎「美の概念の自律性について—モーリッツの美学を中心に—」(『言語・文化研究』12, 1994年, pp.23-32)において、17世紀から18世紀にかけてのヨーロッパにおける芸術の社会受容の変容を芸術の市場化として描写しています。この件は、私が古典主義建築観とロマン主義建築観の興亡としてまとめようとしたことを、異口同音にまとめられていました。近代人として精神の自律性の高揚とともに、美そのものの自律性の称揚が後に、病めるもの、頹廢的な美の概念の誘因ともなった悲劇的な状況が活写されています。

このように、個人の日常生活が息苦しく、単調なものになっていけばいくほど、日常生活とは関係のない美の世界が称賛されることになった。日常生活では決して満たされることのない孤独な魂は、美の世界で自らの理想を見出せるというわけである。

しかし、美の自律性も、実際には美の商品化ということだった。なぜなら美が日常生活遠ざかった結果、再び美に接するためには、人々は今度は代価を支払わねばならなくなったからである。美は日常の生活の中ではなく、閉ざされ、囲い込まれた場所で、代価を支払って鑑賞すべきものとなったのである。美術館の誕生である。…(中略)…ロマン派以降、近代の芸術家は、芸術作品を市民社会への拒否として創作した。彼らによって、芸術作品は日常生活とは関係を持たない「自律的なもの」として造られた。しかし、皮肉なことに、自律的に造られたが故に、芸術作品は、逆に最も市民社会的な場所、つまり市場に組み込まれることになったのである。…(中略)…如何なる芸術作品も、それが芸術作品として成立するためには、誰かに鑑賞され、称賛されねばならない。美を鑑賞し、購買するための「趣味と資力」をもった市民階級の成立なしには、どんな美の自律性も不可能である。市民社会を無視しようとする芸術も、市民社会の影響を決して免れることはできなかったのである。

(p.29ff. ただし、下線部は引用者による)

松本の指摘する状況は、多木浩二が『現代思想』において覚書として発表し

た「抽象とコラージュ」(pp.65-71, 『現代思想臨時増刊号 総力特集=1920年代の光と影』第7巻第8号, 1979年6月, 青土社)においても、活写されています。現代芸術における抽象とコラージュという真逆の手法の確立に近代社会の機能概念として解明しつつ、第三の軸として、キッシュという大衆化の現象(マスメディア、プロパガンダ)を見据えていました。

かつて、M. ロスコという優秀な画家がいましたが、自死しています。イサム・ノグチ氏が、彼の才能と早すぎた死について回顧していたことを弟子の坂口登氏から伺ったことがあります(令和5年5月27日, 金沢市内 於)。何でもロスコの画商が、市場に存在しないものを描くようにと圧迫したそうです。市場が成熟し、コモディティ化が進むと商品の希少性(差別化)に向うことは、マルクスも『資本論』で語ったことですが、個性化の名の下で、芸術家を駆り立て、作品は商品と化していきました。

このような芸術の市場化の動きは、松本が記したように、美の自律の変容という歴史の中で捉える必要があると考えています。

宿題として残された、美の自律(立)性の問題についても、また時間を見計らって回答したいと思います。予告として示します。

- ・美の認識:カントの学説—目的無き合目的性についての考察。構想力との関連。自由な遊動として主観の内的活動。
- ・18世紀における美の論争:絶対美(デイドロ)と相対美(A. Ch. カトルメール・ド・カンシー)の問題から。新古典主義における美の問題。
- ・ロマン主義以降にみる芸術の倫理(J. ラスキンと W. モリス):Lesser Artとしての現代デザイン論。

令和5年10月9日  
熊澤 栄二

#### ■4-4. 岡田→熊澤:これまでの議論の整理と再質問

2023年10月18日(水) 12:29

熊澤先生、皆さま

10月9日付け発信の「美に関する私的考察」について その2—「古代建築の美」への回答と美の自律性

貴重なお時間を割いて、当方の質問にお答え頂き有り難うございます。色々勉強させて頂きました。自分なりに、かなり理解が進んできたと思っています。濃密な情報を有り難うございます。

当研究談話会では、“美”に関する議論から次の話題へ移っているのでこの議論を続けようかどうか迷っていたところですが、どうしても理解に至っていないところがあるので、しつこく質問させて頂くことをお許しください。

ファイルを添付させて頂きます。

これまでの議論の整理と再質問.pdf

岡田成幸

これまでの議論の整理と再質問

意見の引用を簡便に記すため、以下の略号を用いることにします。

【岡田①(岡田■1.)】(2023年9月16日付け発信):美に関する私的考察

【熊澤①(熊澤■4-1.)】(2023年9月21日付け発信):「美に関する私的考察」について その1—古代建築の美

【岡田②(岡田■4-2.)】(2023年9月23日付け発信):「美に関する私的考察」について その1—古代建築の美 に対する質問並びに若干の考察

【熊澤②(熊澤■4-3.)】(2023年10月9日付け発信):「美に関する私的考察」について その2—「古代建築の美」への回答と美の自律性

## 1. 岡田からの質問の意味

これまでの議論をなぞってみます。

【岡田①】において、私は熊澤先生に2つの質問をしています。【p.65 右】の5章「強用美に関する岡田の私的考察」第1パラグラフです。

- 1) 熊澤先生はローマ人の美的感覚をバランスで説明されていましたが、ではなぜバランスの良いものが美しいと感じるのか。
- 2) 建築物には *Venustatis* (美) がなぜ必要なのか。

熊澤先生からは質問1)について、【熊澤①】(【p.70 右】)と【熊澤②】(【p.72 右】)で説明がりましたが、質問2)については、まだ直接的回答を頂いておりません。ウイトルウィウスがローマ時代当時の建築物の必要要素として「強さ、用、美」を併記し、「強がなければ用は果たせない。強と用がなければ美は形だけのもの。そして、美がなければ建築とは言えない。」と学生時代に学びました。この文言が建築書にそのまま記載されているかどうかは知りませんが、人間が構築した「構造物」と「建築物」とには明らかに違いがあり、単なる住処としての構造物、あるいは単なるシェルターとしての構造物と区別し、構造物を建築物と言わしめる違いはそこに“美”がなくてはならないと、ウイトルウィウスは“美”になんらかの意味を込めています。その意味について知りたく、質問2)を熊澤先生にぶつけてみたわけですが、そして私の仮説『ローマ時代において、すでに“美”の絶対的尺度が認識されていて、それを建築物にまよわせることで“美”を抽象化し、建築物の持続可能性を表現したのではないか。』を【岡田①】で示し、その真偽を問いかけてみました。

熊澤先生はこの仮説に反応してくれました。【熊澤①】の【p.70 右】の本文最終パラグラフで次のように結論づけてくれました。

つまり、古代ギリシア・ローマ世界では、強さ・用・美という概念が自律した普遍性を確保し得たということは過度な判断だと言わざるを得ません。飽くまでも、シュムメトリアなどを代表とする比例的秩序(アナロギア)が隅々までいきわたった世界、あるいは秩序づけられたものによりポリス社会そのものが自足し得る状態となっている状態こそが、善であり、この限りで(つまり結果として)、建築物などの物象を「美」と古代人が捉えた可能性は高いと言えそうです。

さらに【p.71 左】補遺において、

古代的な美について。現代でこそ、無秩序なものにも「美」を感じるという感性論で論難するでしょうが、これは世界史的にも、カントの美論を敷衍した結果起こった、近代的なパラダイム変革の一例でしょう。

難しい言い回しですが、熊澤先生が言いたかったことを私流に超訳表現させて頂くなら、『歴史的に見て、ギリシア・ローマ時代においては、シュムメトリアに

“美”を認識し、抽象的“美”はカント以後であるので、岡田の言い分“美”の普遍性はローマ時代においてすでに証明されていたのではないか」という考察は、現代文化に触れている者だから言える“時代を先取りしたかのごとくの戯言”なのである。』

この熊澤結論を一旦了解した上で、そこに記載されている当時の世界観に関する熊澤先生の説明を簡単に換言するならば『ギリシア・ローマ時代の建築はシュムメトリアを目指しただけであって、「強さ・用・美」という自律した普遍性を持つ概念はなかった。シュムメトリアの結果としてもたらされた比例的秩序の世界及び結果としての建築物を“美”と捉えた』。このとおりであるなら、なぜウイトルウィウスは当時の建築要件として「強さ・用・美」という表現を使ったのでしょうか。強さ・用・美とわざわざ3つの要素に分解した表現をとったのは、それぞれの要素に意味を含ませたからであって、熊澤先生が指摘されたようにシュムメトリアの総合的意味として「強さ・用・美」という表現を使うのは、疑問が生じます。また、『この限りで(つまり結果として)、建築物などの物象を「美」と古代人が捉えた可能性は高いと言えそうです。』と説明されていますが、そこで言う「美」とは何でしょうか。美と捉えるには何らかの普遍的意味が当時の人々の間で共有されていたから使える言葉であるはずですが、そこを説明して頂くことが、私の最初の質問2)の答えにもなるのではないかと思います。

これもすべて、ウイトルウィウスの記述をカント以後の後世の人々が、後生の世界観でウイトルウィウスを解釈し直した結果である、との説明も成立するとは思いますが、そうであったとしても、熊澤先生が考える「強さ・用・美」における、“美”の意味(この場合は、今日の意味における“美”の意味を問うことになるかもしれませんが)、歴史的事実という解説(知識)を超えて、熊澤先生ご自身の“美”の意味:建築物にはなぜ“美”が必要なのか)のお考えをお聞きしたいです。これが私からの質問2)の再質問となります。

## 2. 言葉の解釈に関する疑問

次に、ギリシア・ローマ時代のシュムメトリア(比例的秩序)の世界観をもう少し説明して頂きたいと思えます。熊澤先生はギリシア時代のシュムメトリア概念を【熊澤②】(【p.73 左】)において、森田氏を引用しています。

ウイトルウィウスですらシュムメトリアをカノン(*kanōn*)として(ある意味)誤読していた可能性を森田氏が指摘しているところです。この件からも、シュムメトリアは対称性「以上」の概念を包含していることが分かります。

すなわち、『カント以前(ギリシア時代)から、“美”を表現するシュムメトリアには「対称性」以外のより高い抽象性を含意しており、自然界や国の理解に繋がっていたはず』との提示です。

私はここで混乱しました。熊澤先生(森田氏)が言われるようにギリシア時代において“美”に抽象性がまわりついていたのであれば、【岡田①】で私が発信し、そして却下された抽象的“美”の仮説(ローマ時代において、すでに“美”の絶対的尺度が認識されていて、それを建築物にまよわせることで“美”を抽象化し、建築物の持続可能性を表現したのではないか。)はまんざらではなかったのではないかと、という混乱です。

シュムメトリアに関して、もう一点。私の質問1)においてローマ人の美的感覚をバランスで表現されていたことに対するやりとりで、熊澤先生は【熊澤①】で次のように返されました【p.70 右】。

「バランス」という言葉は、もしかしたら取って分けやすさを優先して、不用意な言葉を選んだかも知れません。どちらかというと、均衡やシュムメトリアと言うべきでできた。

ここで、「バランス」と「シュムメトリア」の2つのキーワードが出てきました。

この説明に対して、【岡田②】において『シュムメトリアは可算的釣り合いのみの均衡という訳が当てはまり、可算・不可算の両方の釣り合いを意味するバランスではない、と理解した』と返し、【熊澤②】で熊澤先生からはその解釈でよいとのことでした。しかし一方で前段記載のとおり、【熊澤②】には『シュムメトリアにはより深い意味があり、「数学的幾何学の対称性」のみではなく、それ以外の「比例的秩序」も含意するとし、可視域以外の抽象性もそこに含まれている』との解釈を示されています。その指摘は、【岡田②】で私が指摘した以下の文章【p.72 左】と一致する指摘ではないでしょうか。

ウイトルウィウスが「Firmitas 強さ」の説明において頻出する“比例”とは、シュムメトリアの原理で説明される点対称・線対称を一般には意味しますが、私はむしろ物理学で言うところの“対称性”を意味しているのではないかと感じました。

物理学で言う対称性とは可視域を超えて法則性に関する相似則を言います。しかし、熊澤先生はこれには異を唱えられているようで、【熊澤②】(【p.74 左】)において、以下のように否定されています。

ギリシア人が、「美」という単独の価値観を有していたとは考えにくく、宇宙全体との比例的なつながりを感じることで始めて「美」が問題になるのであり(美は従属的な問題)、近現代のように自律的な「美」、あるいは「美そのもの」という概念を認めることは、管見が及ぶ限りでは難しいと感じています。

すなわち、シュムメトリアには深い意味があるが(但し、バランスではなく均衡で説明される条件付きではあるが)、美には単独の意味はないと言われていきます。しかし、【熊澤①】(【p.70 右】)において、シュムメトリアと“美”の関係について、以下の明快な説明も行っています。

**命題 a:**シュムメトリアが支配するものは、美の理が保たれている。  
**命題 b:**美の理が保たれているものは、シュムメトリアが支配している。  
古代ギリシア・ローマ時代であれば、命題 a および命題 b は等しく成り立つでしょう。古代人にとってシュムメトリアで支配されていることと美の理が保たれていることとは同義(むしろ定義)だったとも言えそうです。

私の理解が十分ではないのかもしれませんが、この記述「シュムメトリアの支配＝美の理」と【熊澤②】の指摘「シュムメトリアの意味≠美の意味」(4-3 全般【p.73 右 f.】)とは矛盾する気が致します。シュムメトリアが比例的秩序(社会的秩序を含む)を意味すると強調されていますが、熊澤先生が例として引用されている記述の中に、不可視的な比例秩序に具体的に触れている箇所を認めることができず(唯一、【熊澤②】(【p.74 左】)に音の世界について触れていますが、これも劇場の内部空間の話ではないかと推察されます)。むしろ目に見える物象を調和ある形態として実現している造物中にシュムメトリアの原理を認めることができます。これはまさしく数学的幾何学対称性(相似的比例関係を含

む)の世界です。なお余談ですが、ほ乳類のほとんどの種は数学的幾何学対称性(透視図法)を理解していますが、物理的対称性は人間にしか理解できません。シュムメトリアと美の関係性について今一度の説明をお願いします。

もう少し議論を進めるなら、熊澤先生がご指摘のとおりギリシア・ローマ時代の「美」はキリスト教的宗教観に取り込まれているようです。ローマ時代には熊澤先生ご指摘のように、価値体系として「美」≪「シュムメトリア(比例関係)」の図式があるようです。比例関係とは(神が創造した)人間のプロポーシオンで世界(宇宙)を理解しようとする思考であり、そこに見えないものが含まれようと、人間中心主義という狭小的ものの見方にとらわれている感想を持ちます。人間のプロポーシオンから想起される比例関係は数学的幾何学対称性であり、物理学の対称性とは意味を異にしていると思っています。【岡田①】で指摘した見えないものに感じる“美”は比例的秩序を超えたものであり、人間が求めるある種の形態・機能・イデオロギー・アルゴリズム・システム等々を含む芸術・文化・哲学・技術・ビジネス・政治・社会などあらゆる分野における最高点に感じるもの、これを“美意識”として捉えているのではないかとこの見方であり、人間が求める普遍性すなわち物理的対称性を持つ美意識ではないかと思う次第です。

### 3. 自律の意味について

【熊澤②】の最後に「自律的美の概念」について解説頂きました(【ibid. 左】)。松本氏の「美」の解釈は、「美が生計を立てる手段として自律した歴史」について語っているのだと思います。それも「美」の一面ではありますが、“美”なる対象を「見えるもの」に限定しての話になるかと思えます。彼が言う「商品化された美」の対象を芸術作品のみではなく「新しいビジネスモデル」に置き換えたとしても、資本主義の中で成立する「美」を扱っているのみであり、私が視野に入れている「人間が求め続ける“美”＝“美意識”」の領域のごく一部にしか過ぎません。私が熊澤先生に考察頂きたいのは、普遍的“美”についてです。

【岡田②】で指摘させて頂いた「自律」に関する質問は、もっと単純な話です。【熊澤①】の文章の中で「自律」という語句が度々出てくるのですが、私にはむしろ「他律」という意味で使われている箇所があるのではないかと疑問が出たので、質問させて頂きました。以下に、再掲させて頂きます。【岡田②】(【p.71 右】)。

3)【熊澤① p.3】自律(立)的な美の概念:前後の文脈からここで使われた「自律」は「普遍的」の意味が込められているようなのですが、自律の対語は他律であり、他律こそが他者(神)からのルールに影響されるという意味であり、西洋人にとっては神から与えられたルールこそが普遍性を意味するのではないかと、思ったのですが間違いでしょうか。

【最終ページ、最終行】近代における美の意識に、病める美や退廃的美も肯定する傾向にあることを、熊澤先生は「これも、近代において、美そのものの自律の極端な事例ではないかと考えています。」と考察されていますが、ここで言われている「自律」は他者に影響されない自分自身の考えという意味に捉えることができます。そうすると、(p. 3 で使われた)自律＝普遍という式は崩れてくる気がします。熊澤先生が使われた「自律」を解説して頂けないでしょうか。「自律」はカントも使っている重要哲学語の一つだと思いますので、よろしくお願ひします。

「自律」は「独自の」という意味で使われているのだとは思いますが、【熊澤①】(【p.70 右】)において

結論から言うと、古代には普遍的な美の概念、つまり「自律(立)的な美の概念」が存在しなかったから、ということになりそうです

と言う文で結論が語られていますが、ここは、『結論から言うと、古代には普遍的な美の概念、つまり「他律的な美の概念」が存在しなかったから、ということになりそうです』という風に読めるのですが、「他者からの影響を受けない普遍的な考え方＝自律的な美の概念」も存在していなかったのは確かなようなので、自律と他律の使い分け(特に普遍性との意味において)について教えてください。

以上、よろしく願います。

#### ■4-5. 熊澤→岡田:「これまでの議論の整理と再質問」への回答1

2023年11月1日(水) 18:47

岡田先生へ

お世話になります。熊澤です。

岡田先生の質問について、私なりの回答をまとめることができましたのでお送りいたします。

後期日程が開始されて早くも1カ月が過ぎようとしています、公私ともに時間を取れなななかとめきれず、11月に入ってしまった。

頂いた質問に対して、1/2もしくは1/3のお返事になるかも知れません。

あまりにも本質を突いた質問で答える方も襟をただし、知識の及ぶ限り回答をしたつもりです。

また今回頂いた質問の射程が余りにも広範に及んだため、回答もいつもにも増して散漫になった気もして心持もないところもございます。

やむを得ず、ソクラテスもしくはプラトンの哲学まで改めて検討を行ったため時間はかかりましたが、有意義な勉強をさせて頂きました。

私が到達した一里塚としてご笑納頂ければ幸いです。

#### 「美に関する私的考察」について その3—「これまでの議論の整理と再質問」への回答1

意見の引用を岡田先生の略号に倣い、拝受しました再質問状を【岡田③】(2023年10月18日付け発信)として分かる範囲でお答えとします。なお下線部は全て引用者によるものです。

#### 1. ウィトルウィウスの「firmitas(強さ), utilitas(用), venustas(美)」の要素の関係について

(【岡田③】の冒頭)

「強がなければ用は果たせない。強と用が無ければ美は形だけのもの。そして、美がなければ建築とは言えない。」【p.75 左】の言説について。この言説に相当するウィトルウィウスの記述は管見が及ぶ限りは見つけられませんでした。ただし、強さ、用、美が同時に触れられている箇所はあまりにも有名な、

これら(引用者注:公共建築)は、また、強さと用と美の理(ratio)が保たれるようになされるべきである。強さの理は、基礎が堅固な地盤まで掘り下げられ、材料の中から惜しげなく十分な量が注意深く選ばれている場合に保たれ、用の理は、場が欠陥なく使用上支障なく配置され、その場がそれぞれの種類に応じて方位に叶い工合よく配分されている場合に保たれ、美の理は、実に、建物の外観が好ましく優雅であり、かつ

肢体の寸法関係が正しいシジューメトリアの理論(ratiocinationes)を持っている場合に保たれるであろう。

『建築書』第一書 第3章

に見ることができます。ただし、岡田先生が学生時代にお聞きになったお話は、どちらかというと近代のJ. ラスキンの(1819-1900)の主張に近い気がしています。

ラスキンの建築観は所謂芸術的建築観であって、建築アーキテクチュアを建物ビルディングより区別し、たゞ実用構造一方のみのものを単なる建物と見、これに装飾、即ち彫刻と絵画(色彩もこの中には含まれる)の二芸術が加はつて初めて建築となると考える観方である。実用、構造の方面はまづ第一に重んずるべきではあるが、芸術的表現がこれに加はらなければ、所謂建築とはならないといふのである。而して真の建築と思はるゝものを過去の建築様式に求め、ルネッサンス建築の低劣を罵り、ゴシック乃至ローマネスク建築の中に讚美すべきものを見出したのであった。然るに今日の建築界の傾向を見るに、かゝる添加的の装飾にはさまでの絶対的 중요さを置かず、在来の歴的様式を離れて、材料構造を自然的に合理的に適応し、用途に応じて建物としての機能を十分に果さしめつつ、それ自身にリズムカルな表現たらしめた上に、建築各部の機能に即して単純に素直に装飾を施して行くという遣方である。即ち、ラスキンの如くに建物と装飾とを別々に見ることをせで、これを一元的ならしむる方向へ進めんとするが今日の傾向である。

高橋喬川「訳者序」(J. ラスキンの『建築の七灯』、岩波書店、初版1930年、p.1)

強と用そして美の問題を別けて論じるのは(次稿に扱いたいと思いますが)18世紀以降の典型だと思います。加えて19世紀末のセセッション(分離派)の運動では、建築と芸術との再統合をテーゼとしていたことが思い出されても良いかもしれません。

さらに岡田先生からは、以下の真偽についても問い合わせを頂いております。

人間が構築した「構造物」と「建築物」とは明らかに違いがあり、単なる住処としての構造物、あるいは単なるシェルターとしての構造物と区別し、構造物を建築物と言わしめる違いはそこに“美”がなくてはならないと、ウィトルウィウスは“美”になんらかの意味を込めています。その意味について知りたく、質問2)を熊澤先生にぶつけてみたわけですが。そして私の仮説「ローマ時代において、すでに“美”の絶対的尺度が認識されていて、それを建築物にまとうことで“美”を抽象化し、建築物の持続可能性を表現したのではないか。」を【岡田①】で示し、その真偽を問い合わせました。

【岡田③】(ibid.)より

この“美”がなくてはならないという解釈について。『建築書』の全十書を通読した限り、美としてウィトルウィウスが触れているのは、14か所でした。その中でも、「美しい」や「甘美な」という修飾語として記しているものを除く、美の理として触れているのは僅かに3か所にとどまります。以下がその全文です。

エウリュトミアとは、美しい外貌であって、肢体の組立てにおいて度に応じて見えることである。これは建物の肢体が幅に釣合った高さ、長さに

釣合った幅、になっていると時、つまり全体がそのシュムメトリアに照応している場合、に成就される。

『建築書』、第一書 第2章3

これらは、また、強さと用と美の理が保たれるようになされるべきである。…美の理は、実に、建物の外観が好ましく優雅であり、かつ肢体の寸法関係が正しいシュムメトリアの理論を持っている場合に保たれるであろう。

『建築書』、第一書 第4章2

美と比例とシュムメトリアで威厳を得ている場合は、実に、建築家の誇りであるだろう。

『建築書』、第六書 第9章9

事実、『建築書』を確認した限り、「美」そのものについて、概念として触れた議論が余りにも少なく、しかもその「美」の議論は常に、「シュムメトリアが実現されている限り」で美が語られるのであり、この逆ではありません。【熊澤②】(p.74 左)で指摘した様に、少なくともウイトルウィウスにおいては、自律的な美という課題が存在しなかった可能性を再度、指摘せざるを得ません。ウイトルウィウス自身が哲学的な素養がなく、美に関する哲学議論に疎かだったと仮定することも難しいと思われます。曰く「哲学は、実に、建築家を心広く、かつ傲慢でなくてむしろ気安く平等であり、貪欲でなくて誠実であるように仕立てる。これは一番大切なことである。」(『建築書』第一書第1章7)とも喝破されており、ウイトルウィウス自身、一定の哲学的素養を積んでいたと指摘することもそれほど不自然とは思えません。

このことを裏付けるように、『建築論』第三書序の1および3では、ソクラテスの「無知の知」をあげつつ建築家が学識を有することの重要性、また建築家としての素養について論じています(無学なものの求職訪問と争うべきではないとの論しとして。「未若貧而楽道。富而好礼者也。」「未だ貧にして道を楽しむが若くならず、富みて礼を好む者なり。」:論語-学而第一)の境地か?)。加えて、第九書では国家の健全性を維持するため、市民として「ピュータゴラス、デーモクリトス、プラトーン、アリストテレスその他の学者たちの教本」(同書、序2)に触れて、すぐれた知的判断力を得るべしと論じています。つまり、ウイトルウィウスはソクラテス即ちプラトーンとともにアリストテレスの書にも親しんでいたことを彷彿とさせます。

なおアリストテレスへの言及は先の一度きりであり、寧ろ魂の修養などの論点からは、ソクラテスあるいはプラトーン(以降は、プラトーンと統一)への共感を読み取ることができます。よって以下、ウイトルウィウスも親しんでいたであろうプラトーンにおける美の問題を観察することで、古代世界において、どこまで「美」の「普遍的意味が当時の人々の間で共有」(【岡田③】、(p.75 右))されていたか、概観してみたいと思います。

## 2. 古代ギリシアにおける「美」の普遍的意味の確立時期の考証

プラトンの著作において、「美」について全面的に議論を行ったものは、『ヒッピアス(大)』、『饗宴』そして『パイドロス』をあげることができます。なお、ヒッピアス(大)およびパイドロスでは「美について」<sup>1)</sup>と副題が付されています。

さて、三書を検討する前に『プラトン全集 10』(岩波書店)の『ヒッピアス(大)』解説(pp.201-216)に「ギリシア語の美」について、北嶋美雪のすぐれた解説がありますので、そのまま全文を掲載します。

…それはすでに気づかれているであろうように、「美」「美しいもの」「美しいこと」と訳出したギリシア語のト・カロン(το καλόν)という言葉の問題である。この言葉の概念や意味内容は日本語の「美しいもの」「美しいこと」の含意するものよりは広範であって、「美しい」とギリシア語で言われている対象は、(1)人や物の外形、(2)人間の営為・仕事、風俗習慣、制度、法、学問、そして、(3)道徳的行為、のすべてを包括するので、(2)や(3)のような場合は、われわれの言葉では「立派な」「すぐれた」「善い」「ふさわしい」「ほめられるべき」「名誉とされる」というような言葉で表現されるほうがむしろ適切な場合がある。

『ヒッピアス(大)』解説 / 『プラトン全集 10』(北嶋美雪、1975年2月, p.209f.)

古代ギリシア語には、後のプラトンがイデア論の完成において重視する「善」への連続性がト・カロンに含意されている点を見逃すと、ヒッピアス(大)における問答でのソクラテスの切り返しの鋭さがピンとこないかも知れません。

さて、ヒッピアス(大)との対話について先の北嶋訳本を底本として検討しますが、美について触れている箇所はざっと57箇所、そのうち「美そのもの」について指摘している箇所は17箇所でした(飽くまでも、関連する議論の数であり、美の文字のみを数えると2割程度は増える可能性がありますので参考までに)。ヒッピアス(大)は、全30段から構成される戯曲という構えで、抽象的な所謂、「美そのもの」について本格的に分析を行うのが、21段と29段です。初期プラトンの作品と言うこともあり、美そのものという指摘は繰り返してきていますが、それをイデアとして語ることはありません。ただし、「…をそのように見せる」などの表現が頻発しているので、イデアを十分に射程に入れた語り口<sup>2)</sup>となっている、すなわちイデアと言わずしてイデアを暗示しているのが作品としての特徴だと思えます。

ヒッピアス(大)はエーリス出身の代表的なソフィストであったようで、「しんじつ知恵があり、完璧な人間である」(281B)あるいは「それにあなたが博識だからです」(285E)とソクラテスに誉めそやされ、慢心の極みか、ヒッピアスは「あの国(引用者:ラケイダイモン(スパルタ)(281B))で最近はまださまざまの美しい仕事のことについて、ぼくは青年が業とすべき営みを詳しく語って好評を博したのだ。」(286A)と豪語してしまう。さらに迂闊にもペイドストラトスの講義場で美しい仕事についての講演を披露するので、ソクラテスにも是非とも参加して欲しいと願ったことが切っ掛けとなり、泥沼のような美の対話に付き合わされる羽目になります。

事実、ソフィストとして博識を弄するヒッピアスは、最後の30段に至るまで「美とは何か」というソクラテスの問いに対して、「美しいもの(乙女)」(287E)、「美しくみえること」(289E)、「美しくあるもの」(292E)、「美しく見えさせるもの」(294A)、「有用であるかぎりのもの」(295C)、「有益なもの(有用にしてまた何か善いことをなしうる能力の有るもの)」(297D)、「視覚と聴覚によって生ずる快感」(299B)、「有益な快楽」(303E)と行き詰まりを見せながらもより「美しいものそのもの」に肉薄していきます。しかし、最後まで「美とは何か」に対する答えが見つからないため、ソクラテスは「<美>について、それがそれ自体としていったい何であるか知りもしないと、かくも明白に反駁され証明されながら、美しいものもろの 営みなどについておこがましくも話し合おうとするのを恥ずかしく思はないのか」(304C)とヒッピアスを嗜み、「美しいこと(立派なこと)は難しい」という諺の文句を言い放ち(304E)、対話は打ち切られます。

ところで、後に究極の原因として語られる善のイデアに相当する「善と美」そのものの議論について、図らずも転倒した結果をソクラテス自らが導いた21段は、プラトン初期作品としての揺れ動きを見る思いで興味深くもあります。

「そうすると、もし美が善の原因ならば、善は美によって作り出されるのでしょ  
う。そしてどうやらわれわれが知恵にせよ、その他すべての美しいものにせよ、  
熱心に追及するのは、まさしくそうした理由に因るようですね」(297B)とソクラテ  
スが議論をまとめつつも矢継ぎ早に、「原因(引用者: 美)は作り出されるもの  
ではないし、また作りだされるものの原因ではない」と先の結論への矛盾をヒッ  
ピアスに突きつけます。この結論に対して「ヒッピアス。このわたしにしたところ  
で、これまでにわれわれが論じてきたどの言説にもまして満足できません。」(297C)  
とソクラテスはこの議論の帰結に大いに不満をあらわし、これ以上の議  
論の継続を放棄してしまいます。

後のプラトン哲学の展開(特に、中期のアイデア論の完成期)を知る現代人にと  
って、このアポリアの難所を指摘することは容易い。プラトンがどこまで意図し  
たかは不明ですが、議論の嚆矢として放った「<美>そのものとは何か」(286D)  
の初発の問いから、実は美の自律的な在り方をソクラテスは認識していたこと  
を指摘するのは肯じられそうですが、明確に「自覚していたか」と判断するのは  
早計でしょう。大ソフィストでもあったヒッピアスですら、議論の終局に至るまで、  
<美>そのものと美を原因として現れた美しいものとの区別については、じつに  
蒙い。

さらに先の 21 段で開陳されたソクラテスの原因に関する見解において一逆  
説的ではありますが「美が作り出されたもの」という謬見がソクラテスにも潜ん  
でいたという驚くべき事態にわれわれは遭遇します。この 21 段のアポリアは、  
飽くまでも「美が作り出されたもの」との臆見から逃れ得ず、ソクラテス曰く「ゼウ  
スに誓って、ねえあなた、してみるとなんと、美は善ではないし、また善も美で  
ない！」とのあまりにも非ソクラテス的な見解に双方邂逅し、善と美のとのスリン  
グな議論はこの場においてついに放棄されてしまいます。

訳者である北嶋は、「年代を暗示するものは特に見当たらないが、年齢を四  
二、三から五くらいと見てよいだろう。」(北嶋前掲書、p.218)とヒッピアス(大)  
との対話を行ったソクラテスの年齢を推定しています。ソクラテスは前 470 年生  
まれなので、前 425 年頃にはまだ「美そのもの」という自律的な概念が確立さ  
れていないことを確認することができます。

では、美がそのものとして観察される初発はいつのころか。『パイドロス』より  
前の作品とされる『饗宴』を検討してみます。鈴木輝雄は『饗宴』解説(『プラ  
トン全集5』岩波書店、1974年10月、pp.273-293)においてロバン(Léon Robin,  
1866-1947)の分析(1929)をもとに、「これを要するに、本編は文学的虚構の書  
であり、その主題はエロース論、それもプラトンのエロース論である」(鈴木同上  
書、p.292)と結論づけています。戯曲中で、ソクラテスに「エロース論の奥義を  
授けた」と描かれるマンティネイア(ペロポネソス半島中央部の山地アルカデ  
イアの東部高原)の婦人ディオティマは、ソクラテスの追想の形を借りてエロ  
ース論をもとにした「美」の本質を開陳していきます。

ところで対話の設定年代について、鈴木はソクラテス 45 歳(前 416 年)と考  
証<sup>3)</sup>しています。ただし、先に示したようにこの戯曲そのものが史実ではなくプラ  
トンによる虚構の物語であり、またプラトンが本編を執筆した紀元前 385 年よ  
りあとの数年間だとの鈴木推定(鈴木同上書、p.276)をもとに検討すると、この  
「美の本質」の現れ(少なくともプラトンによる自覚)は『饗宴』の執筆時期の前 4  
世紀末であったとの推測が成り立ちます。

さて、舞台となった饗宴<sup>4)</sup>は、ソクラテスがアリストデモスより宴席に遅れてき  
たところから始まります(174E)。会場に無事到着したソクラテスは御馳走に与り、  
皆が灌奠(かんてん)の儀を行い、神への賛歌を歌い、定め儀式を行って  
から、いよいよ酒を飲むに及んで、アリストパネスは次のように切り出す。「現在  
この会を進めて行くのに酔っぱらいながらというのではなく、まあ気の向くまま

に飲みたければ飲む」といった調子でやろう」(176E)との意見に一同の賛同を  
得る。話題は、エリュクシマコスの提案により「できる限り美しくエロースの賛美  
をなすこと」とされ、「このような論議になるもの生みの親でもある」パイドロス  
から口火を切るようになった(177A-D)。

エロースの賛美の話は、パイドロスをその嚆矢として、パウサニ阿斯、エリュ  
クシマコス、アリストパネスと物語の 16 段まで続く(まさに競演)。その後、アガ  
トンとソクラテスの対話が 21 段まで続くが、その対話の果て「それでは、もしエ  
ロースが美しいものを欠いており、しかもよきものは美しいものであるとすると、  
エロースはまたよきものを欠いていることになるだろう。」(201C)というアポリア  
に邂逅してしまう(21 段の終わり)。22 段からソクラテスはアガトンを対話から  
放逐し、代わりに(プラトンの創作によると推定される)「マンティネイアの婦人デ  
イオティマ」から教授されたという「恋愛道」(201D)の話がソクラテスの一人語り  
として開陳されていきます。

ディオティマの言説を検討するに当たり事実関係は以上の通りですが、な  
ぜははじめからディオティマを取り上げなかったのだろうか。プラトンの意図とし  
ては、それぞれの論者により報告されたエロースの断片である、既にみられた  
ものから、未だ理解されておらず概念把握されていない「そのもの」へと導くこ  
と<sup>5)</sup>、すなわち *επαγωγή*(エバゴゲー: 帰納法)をやって見せたような気がしま  
す。すべての議論の道が逢着する「ある地点」つまり「そのもの」は次のようにデ  
イオティマによって示されています。

ところで人間の営みの次には、もろもろの知識へと彼を導いて行か  
なければなりません。その目的とするところは、このたびもまた当の者がもろ  
もろの知識の美を觀取し、その眺める美もいまや広大な領域にわたるも  
のとなつて、もはや下僕のように、一人の少年の美とか、一人の大人の  
美、あるいは一つの営みの美のように、一つのもののもとにある美を  
ありがたがってそれに隷属して、眼界狭小な人間としてあることのない  
ようにということです。それどころか、美の大海原に向かい、それを觀想  
し、惜しみなく豊かに知を愛し求めながら、美しく壮大な言論や思想を  
数多く生み出し、ついには、そこで力を与えられ成長して、次のような  
美を対象とするとき唯一のある知識を觀取するようになるためなので  
す。どうかできるだけ精神を集中するようにやってみてください。…さて、  
いろいろの美を順序を追って正しく觀ながら、恋の道をここまで教導  
かれて来た者は、今やその恋の道の窮極目標に面して、突如として、  
本性驚歎すべきある美を觀取することでしょう。これこそ、ソクラテスよ、  
じつにそれまでの全努力の目的となっているところのかのものなので  
す。

(210D-211A)

では、ディオティマが語る「全努力の目的」すなわち「かのもの」とはどのよう  
に獲得されるのでしょうか。さらに次の語りに注目します。

つまり、地上のもろもろの美しいものから出発して、絶えずかの美しいも  
のを目的として上昇して行くのですが、その場合ちょうど階段を使うよう  
に、一つの美しい肉体から二つの美しい肉体へ、二つの美しい肉体から  
すべての美しい肉体へ、そして美しい肉体から美しいかずかずの人間  
の営みへ、人間の営みからもろもろの美しい学問へと登って行き、最  
終的にはそのもろもろの学問から、ほかならぬ美そのものを対象とする  
ところのかの学問に行き着いて、まさに美であるそのものを遂に知るに

いたるというわけなのです。

(211C)

とこのように、ディオティマはその一つ一つの「美しいもの」から「美そのもの」への知の獲得の階段を語っていきます。この「美そのもの」を観ることができたとき、翻って、すべての生きることが肯定されると彼女は続けて語ります。

親愛なるソクラテス、いやしくも人生のどこかにあるとするならば、まさに此処においてこそ、その生活が人間にとって生きるに値するものとなるのです。なぜなら、その者は美そのものを観ているからです。…現在のあなたは、その青少年たちを見て有頂天となり、またあなただけではなくほかの多くの人々も、もし自分の愛する少年を見ながら絶えずその者といっしょにいるのであれば、飲食も、何とかできるものならば、撰らずにただただ彼を眺め彼といっしょにいたいものだ、というありさまですけれどもね。

(211D)

ディオティマは、「美そのもの」を後の人々がそのように言う「善のアイデア」(すなわち、善/美のアイデアによる形而下のもの)の肯定として語っていることが分かります。ディオティマは「ただただ彼を眺めいっしょにいたい」という恋する者の心にあらわれる現象について、これ以上の言及<sup>9)</sup>はありません。しかし人が「美そのものの純粹清浄無雑の姿」を見えるとき、むしろ一つ一つの「美しいもの(美しい人、死すべきつまらぬものにまみれた姿)」が幻像ではなく「真の徳」として現れてくるそのとき、美における善としての性格が全面的に開示されていきます。

かの美を見るに必要な器官をもってそれを見ているこのときのみ、次のようなことが起こるのであるということ。それは、彼の手に触れているものが幻像ではなく真の徳であるということ。さらにはその者は、真の徳を生みそれを育てるがゆえに、神に愛される者となり、またいやしくも人間のうちに誰か不死となることができるならば、またさらにその者こそ不死の者となりうるのだということ

(212A)

とディオティマの話がしめくられています。

ソクラテスの想像上の人物、ひいてはプラトン自身の思想を代弁するディオティマの話をつなぎ合わせて紹介しましたが、要するに、美そのものが現前する美しい人を見ることによって引き起こされるその過程と原因を通して恋(エロース)が説明されています。恋することは動物的な欲情により惹起される邪淫とは区別され(最も低劣な恋)、飽くまでも恋する者の魂が美しき人に現れる究極のアイデアである善もしくは美(そのもの)を観取ること、また観られたその限りにおいて、その美しき人の肢体は真の徳として目の前に現れると説いています。

中期プラトン哲学の完成を示す『パイドロス』においては、恋する者が恋を通じて美しき人を、その本来の神々へと近づけるために教え導く努力<sup>9)</sup>が説かれますが、このような恋する者の行為についてはディオティマの説教に見出すことはできません。『饗宴』とは異なり『パイドロス』では、かの有名な「よい馬、悪い馬、馭者」の巧みな比喻により、美しい人にエロースの徒である恋する者が魅かれる理由、そして恋することが如何に愛知者の行為であるかをソクラテスは語ってみせますが、しかし先のディオティマの語る恋の話と基本的な構えは

酷似しています。

### 3. 古代ギリシアにおける「美」の普遍的意味について

古代ギリシア時代における「美そのもの」の普遍的意味の成立状況を観察するためにプラトンの説教を概説してきました。アリストテレスの四因説に従えば、形相因(αἰδος)として物ごとの原因(αἰτία)を説いたはじめての愛知者はソクラテス(プラトン)との報告をもとに判断すると、先に解説した美についての説教こそが美についての普遍的意味を示した最古の記録であったことがご納得頂けるかと思います。

大変長い説明が続きましたが、ここでようやく岡田先生の「2)建築物には Venustastis<美>がなぜ必要なのか」についてお答えする準備ができたと思います。加えて【岡田③】において「美と捉えるには何らかの普遍的意味が当時の人々の間で共有されていたから使える言葉であるはずで、そこを説明して頂くことが、私の最初の質問 2)の答えにもなるのではないかと思います。」(p.2)との示唆も頂いていますので、「美と捉えるには何らかの普遍的意味が当時の人々の間で共有されていた」という問題に答えたいと思います。

確かに、ソクラテスは、『ヒippias(大)』において美の普遍的意味を捉えていたことは疑えないと思います。その対話の初発からソクラテスは「美そのものとは何か」と問の形で辛うじて普遍的意味を確保していたと指摘できます。しかし、美そのものの自覚あるいは概念化までは及ばずソクラテスですら諦めています。若かりし日のソクラテスの問答『パルメニデス』において、「毛髪、泥、汚物、その他おおよそ値打ちのない、至極つまらないものについて、これらのそれぞれにも形相(130C, D)が存在するか、というパルメニデスの鋭い問いに、さしものソクラテスもたじろぎます。続けてパルメニデスの「例えば<似>を分取することによって似、<大>を分取すれば大、<美>や<正義>を分取すれば正あるいは美となるというのかね」(130E)という問いについて、形相(アイデア)の分取と全体の関係が若きソクラテスには判然としていません。その後、形相が心においてとらえられるならば形相としての全体を放棄せずに存在するものに形相の分取が可能になる、とソクラテスは切り返します。従って、「これら形相のそれぞれはおそらく観念なのかも知れません。それが生ずる場所としては、心のなか以外に適当なところは何もないかも知れません。」(132B)とソクラテスは語っています。つまり、青年ソクラテスは、美が観念であることをこのとき理解したようです。

この問答は、アテネの市民ピュトドロスによって報告された物語の形式をとります。この話の時代考証として田中道太郎は前450年頃、ソクラテスのごく若い頃の対話であったと推断しています<sup>7)</sup>。すると前450年頃までは「美」として普遍的意味が確立されていない(当然、心の中には現れていたのでしょうか)と判定せざるを得ません。畢竟するに、前450年頃は「美」は未だ普遍的な意味として十分に確立されておらず、そのおよそ25年後にあたる前425年にヒippias(大)との対話にいても美の普遍的意味はソクラテスの中にも明確化されず、その完成は弟子であるプラトンの『饗宴』が執筆された前385年をまたねばなりません。

しかも、プラトンによって仕上げられた美の観念は、先に縷々みてきたように<善>と一体として見られており、現代のように美の自律性・独立性を意識していた気配は微塵も感じられません。<善>の影響圏において美が語られていることは注意が必要です。美は「そのもの」として把握されているにも関わらず、あたかも善のアイデアの影のごとく語られているともわれわれには見えています。

先にもあげたように、ソクラテスを悩ました、つまらないもの(毛髪、泥、汚物)にもその形相が認められたように、確かに万物はその形相としてのアイデア、別

言すれば普遍的意味を(分)有します。しかし、「普遍的意味が認められていたこと」と「その普遍的意味が自覚化され定義されていたこと」は明確に区別することが必要です。

さて、ウィトルウィウスの『建築書』について森田は「その成立年代は紀元前三十三年から二十二年に至る約十年に設定されるのが妥当であろう」(森田前掲書、「あとがき」、p.355)と『建築書』の成立年代を推定しています。プラトンの美についての議論からおおよそ 350 年後にウィトルウィウスが古代ギリシアの建築技術の一切をまとめたのは事実として、果たして美の普遍的な意味が自覚されていたかについてはやはり懐疑的にならざるを得ません。ウィトルウィウスは建築家としての魂の修養のためにプラトン哲学を推奨していたことは先述した通りですが、建物の制作の場面において美そのものを論じるだけの必然性が余りにも弱いと言わざるを得ません。エウリュトミアに従って、建物(この場合、公共建築)はより立派に美しくあるべきだとは論じていますし、縷々指摘させて頂いているように、それぞれの建物の肢体に対して適切なシュムメトリアが実現された際に、それを美しいと表現した件は散見されます。しかし制作を通じて美そのものとして自覚・探求していたという痕跡を見出すことは難しいと言わざるを得ません。

#### 4. 熊澤の“美”の意味について

「熊澤先生ご自身の“美”の意味:建築物にはなぜ“美”が必要なのか」(【岡田③】(p.75 右))の回答の一部となりますが、先ずは古代ローマ時代もしくはウィトルウィウスが報告した古代ギリシア時代について次のようにまとめておきます。この時代、美の普遍的意味は把握されていたとは思いますが、美をその制作の目的因としたのではなく、(敢えて言うならば)形相因として美しき形を求めたとは推定できます。古代の建築技術における美の問題は、魂が真理へと誘われるような、あるいは崇高さとして把握されることは確認できません。このような問題の枠組みは 18 世紀末のフランス古典主義(寧ろ、新古典主義—E. L. プレー (Etienne-Louis Boullée, 1728-1799))の建築理論をまたなければなりません。従って、古代における美の問題は、「美」の実現ということではなく、社会的な認知としての「相応しさ」の実現だったのではないかと想像します。

「美そのもの」のような形而上的な存在と建物のそれぞれの「美しさ」との開きは確実に存在していたと想像しますが、その「懸隔それ自身」が古代社会では自覚化されていなかったと思います。シュムメトリアに従う限り、そこに醜美の疑いそのものが介在する余地が無かった(問題にすらなっていなかった)と考えています。何故ならシュムメトリアは神の比例の似姿として真理の現れだったからです。しかし、前 30 年頃のローマ帝国内でも古代ギリシアの哲人の思想が教養として課せられていたようなので、少なくとも建築家としてその魂は美そのものに関与していた、言い換えるならば哲学を学ぶなかで美そのものに志向していたと想像することは、強ち間違いとも言えない気がしています。

本稿の冒頭にも引用しましたが「美の理は、実に、建物の外観が好ましく優雅であり、かつ肢体の寸法関係が正しいシュムメトリアの理論 (ratiocinationes) を持っている場合に保たれるであろう。」(『建築書』、第一書第 3 章)を注意深く見てみると、美の理 (ratio) はシュムメトリアの理論が建築の各部位で上手く実現されている場合に「保たれる」とされているので、美は当然としても、強さも用も、シュムメトリアが原因となり実現されるのであって、その逆ではありません。

誤謬を恐れず言い換えるならば、古代世界においては、シュムメトリアの理論が隅々まで建物に実現しているならば、その頑丈さ・耐久性については「強さ」として、その場所の適応の相応しさや使い勝手については「用」として、聖なる比例が建築の肢体の隅々まで規定している様を「美」として表現しているの

であり、現代のように「強さ」「用」「美」を目的として建築行為を成し得ていたとは、どうしても考えにくいというのが私の見解です。極端な意見ではありますが「強くさえあれば良い」「便利だったらそれで良い」「美しくければそれで良い」など現代では、過激な見解を強めてくる場面は珍しくありません。

古代ギリシア・ローマの世界に限らず、前近代的な社会ではどの地域であっても、建築制作のカノン(様式など)というものが支配的だったため、現代のような極端な見解が起こる余地が無かったと思います。良くも悪くも、様式に従い制作される限りにおいて、一定の強靱さ、用途の適切さそして美しさは自ずと担保されていました。

さて結論を急ぎますが、現代において往々に惹起されている価値の分裂は以下のできごと起因すると考えています。

**1.強さの自律(立)化:**近代以前は、経験則により洗練化された様式を遵守することで、建物の強さを取って保障する必要がなかった。数学による世界表象の時代に入り、力の概念が数量として把握され、純粋な数学モデルにより強さについて、単独で議論が可能になった。特殊な例となるが 20 世紀初頭の A.ガウディ(1852-1926)は、ネオ・ムディハール様式を脱却するなかで、純粋なカテリーナ曲線による建築デザイン(剪断力が生じない、軸力だけの構造物)を目指した。因みに新機軸の技術で制作されたことで有名な水晶宮(The Crystal Palace;1851)において Sir J.バクストン(1803-1865)は数々の温室建設の経験やモデルにより安全検証(むしろ安全説明)を行っただけであり、純粋な計算力学による解法の結果ではないことが判明している。

**2.用の自律(立)化:**近代社会では生産手段を有する中産階級が社会に定着し、工場をはじめとして新しいプログラムに対応する必要(新しいビルディングタイプ)が生じた。新たな建築プログラムに様式を適応させることが、極端な様式主義を招き意匠と計画の乖離を招いた。また住宅計画においても、20 世紀初頭に動線分析の研究が進み、平面計画の合理化は伝統的な平面形式を陳腐化させた。フランスにおいて、18 世紀の J.F.ブロンデル(1705-1774)の建築理論では間取りを中心とした計画が、フランス的精神の表現として自負していたことは、そのはじまりと捉えることができる。

**3.美の自律(立)化:**フランスアカデミーにおいて建築芸術の優位性の立証、即ち 18 世紀末から徐々に浸透しはじめたロマン主義への対抗としてボザールの建築理論の確立は、時代の要請であった。特に、模倣芸術論が趨勢であった近世ヨーロッパにおいて、自然の範型をもたない建築芸術の理論構築が急務であった(その嚆矢として、ロジエ (Marc-Antoine Laugier, 1713-1769)の『建築試論』第二版(1755)の扉絵に挿入された「原始的な小屋」が有名である)。18 世紀以降の美学を根拠とした建築理論により、芸術における建築の美の理論体系が完成期をむかえています。18 世紀人である D.ディドロ(1713-84)などの百科全書時代の哲学者が提唱する「絶対美」に対する A. Ch. カトルメール・ド・カンシー(1788-1825)の「相対美」の優位性の論争は、美そのものの自律性を結果的に助長した。

このような、建築を構成する価値群が乖離するなかで、19 世紀末のヨーロッパの建築界では J. ラスキンはゴシック・リヴァイバルを称揚し、強さと用と満たした建物(building)のみならず絵画や彫刻芸術を統合させたものを建築(architecture)と呼号するなど、乖離した価値の再統合にむけた運動が展開します(これも、冒頭で説明しています)。

以上のような近現代の背景を踏まえて、「熊澤先生が考える「強さ・用・美」における、「美」の意味(この場合は、今日的意味における「美」の意味を問うことに

なるかもしれませんが、歴史的事実という解説(知識)を超えて、熊澤先生ご自身の“美”の意味:建築物にはなぜ“美”が必要なのか)のお考えをお聞きしたいです。これが私からの質問 2)の再質問となります。】(p.75 右)にお答えすることができそうです。

最初に、弁解ではなく、私としては論文においても「美」ということを積極的に論じたことが無い<sup>8)</sup>ことを記しておきたいと思ひます。美という問題を低劣な問題とか、避けていた訳ではなく、「美しい」と感じることを主題にできないからと感じています。建築設計を批評する際にも「美しい」という表現はほぼ使わない気がします。経験の多少については不問として頂くとして、デザインコンペの審査員もそれなりに熟してきた立場からすると、評価軸に「美しさ」を論じた記憶が皆無です。私ごとにはなりますが、作品を評価する際はコンセプトとデザインとの「(関係性)」については大いに議論することはあります。

大学受験時は不肖、画家を目指していたこともあり、美については長年関心を持っていたつもりです。しかし美しくあることは飽くまでも「最低ライン」であって、むしろデザインが如何なる社会的な課題を解決するのか、あるいは変革するに足り得る力があるのかに批評の力点を置いて自負しています。傲慢なつもりはないのですが、そもそもある一定の美さ(社会的に承認されるべき美しさ)がないものを提案することを悪と感じているのかも知れません。

この意味での美とは、万人が修練により獲得できる美、あるいはどのような民族によっても一定の評価が可能な美を意味しています。具体的には、幾何学性に準じたデザインの規則性、説明ができない要素の排除などです。レゾン・デートル(raison d'être: 存在理由・存在意義)が説明できないものを徹底して排除する、デザインとしての基本的な骨格を単純化する、ということは万人が理解できる美です。これすらも満足できないものは認めることができません。これが私の信じている建築における美だとお考え頂いても結構かと思ひます。建築士法が定めるように建築物は私財を超えて社会的・公共的な財産でもあります。

この点、怪しげなアートとは一線を画すべきと考えています。

所謂「アート」と喧伝されている領域、特に感性を謳歌する類の活動は正直、納得ができていません(判断として保留しています)。本来の art はラテン語の ars を語源としたもので、技術に由来します。そのため残念ながら、技術を感じない子どもの無垢な絵を私はどうしても芸術として認めることができません。最高の芸術は、徹底した技術修練の先にあるものと信じているからでしょう。現在の「アート」は前稿でも示唆しましたが、商業主義の嫌いを強く感じています。商業的にも成功をおさめたかの P. ピカソはデッサンの名手であることはよく知られています。確かに青の時代のピカソに天才性を私は感じていましたし、晩年の奔放な画風は苦手なものもありますが、彼の線画は晩年も衰えを感じません。一方、ピカソのライバルとも知られる晩成の H. マティスの立体作品はピカソのものよりも優れたセンスを感じます。構図の鮮やかさもマティスの方が一枚上と感じています。

これ以上の芸術についての考察は、「3. 自律の意味について」【岡田③】(p.76 右)の報告に譲りたいと思ひます(芸術もしくは美の問題を自律的な観点から論じるのは、美学を学と確立した I. カントおよび F. シラーの 18 世紀以降の動向を交えて考察したいと思ひます)。

以上、「1. 岡田からの質問の意味」【岡田③】(p.75 左)までの回答と致します。

令和 5 年 11 月 1 日  
熊澤 栄二

## 註】

- 1) 訳者である藤沢令夫によると『パイドロス』に付せられている伝統的な副題は「恋について」もしくは「美について」が、最も一般的には「美について」であるとの解説を寄せている。(『『パイドロス』解説』/『プラトン全集 5』、岩波書店、1974 年 10 月、p.309)
- 2) 小坂は「ὄρα とは、(見る)という動詞から由来した言葉で、原義は「見られたもの ὄρα」という意味である。プラトンはこの言葉を「理性」(ノエーシス νόησις)によって直観されたものという意味で用いた。」(小坂国継;「プラトンのイデアについて」/『伊藤典子教授定年退職記念号』、日本大学経済学部、2015 年 1 月、p.42)とのイデアの原義を解説している。イデアが「見る」という動性のうちに胚胎することからも、プラトンの意図を補足してくれる。
- 3) 全文は次の通り。「それは本文にある通り、アガトンがその悲劇をもって最初に優勝した折のことである。すなわち、アテイオスによると、エウペモスがアルコンであった期間のことで、前四一六年、詳しく言えば、ガマリオン月(一二月)に行われたエイアイナ祭、つまり小ディオニュシア祭でのことである。とすると、この時ソクラテスは四五歳ということになる。」(鈴木同上書、p.275)と具体的に推定している。
- 4) プラトンにより描かれた『饗宴』は、「とかく乱暴狼藉に流れるだけの単なる酒宴ではない。…より高級なものにおいては専らまじめな議論が行われたのである」(鈴木同上書、p.278)と評価されている。
- 5) 余談にはなりますが、「ただただ彼を眺め」の件は、まさにカントが後の判断力批判において指摘した「美における構想力」の問題を彷彿とさせます。この『饗宴』の後に執筆された『パイドロス』において、このエロースにおいて惹きつけられる現象について「この魂が、青年にそなわる美をまのあたりに見つめながら、そこから流れてやってくる粒子を一このように粒子(メレー)の流れ(ロエー)の放射(ヒーエナイ)であるがゆえに、それは『愛の情念』(ἄρεος)と呼ばれるのであるが—この愛の情念を受け入れて、うるおいをあたえられ、熱くなるときは、魂はそのもたえから救われて、よるこびにみたまされることになる。」(251C、藤沢令夫 訳;パイドロス、岩波書店、1974 年 10 月)とソクラテスは語っています。  
私見に過ぎませんが、「ただただ彼を眺め」という言葉無き無限の対話の如き沈黙に対して「愛の情念」説は、あまりにも具象化されている嫌いを感じています。美の認識において誰もが実感する「美の流れ」あるいはカント的には終局をもつこともなく自己自身の内に充足する「見つめること」(Betrachtung) との関係は後に検討することにした。
- 6) ソクラテスは愛人に対する教え導くこと(すなわち教育)を次のように具体的に記しています。「ヘラに従っていた人たちはいずれも、相手が王の性格をもった者であることを求め、そういう相手を見出したならば、すべてにつけて同じことを、この恋人に対して行う。さらに、アポロンをはじめそれぞれの神の従者だった人たちは、その神にならって道をあゆみ、自分たちの愛人が同様の性格を持っていることを求め、そして求める相手を得たときは、自分自身も神をみならうとともに、愛人にも同じようにすることを説得したり、そのための訓練をほどこしたりしながらそれぞれの力のできるかぎり、その神の生き方に従い、その神の姿に近づくと、愛人を導いて行くのである。こうした愛人への態度には、嫉妬もなければ、いやしい人間がもつような、けちくさい悪意といえない。いな、彼らのこのような行為には、ただひたすら、力のかぎりをつくして、愛人を自分に、ひいては自分の尊崇する神に、できるだけ完全に似た人間にしようとする努力あるのみである。」(253B, C)
- 7) 田中道太郎;『『パルメニデス』解説』/『プラトン全集 4』、岩波書店、1976 年

6月、p.347

8)唯一の例外として「美」について論じたのが『建築論私論』(『建築論研究』編集委員会、『建築論研究 第2号』、2020年12月、pp.105-112)の中の「3.美とは」(pp.109-111)である。

#### ■4-6. 岡田→熊澤:返信

2023年11月2日(木) 9:04

熊澤先生、皆さま

熊澤先生からの重量級のお返事、拝受いたしました。当方の質問に限りなく真摯にお答えいただいたこと、心より御礼申し上げます。

論理的な筆の進め方に触れ、心躍ると共に感激に打ち震える感覚を久しぶりに味わっています。読みこなすのにもう少し時間を頂きたいと思いますが、研究談話会第二期において、熊澤先生と科学技術についてメールでやりとりした時の学生時代に似た熱い思いが再び訪れた感覚に、うれしくなりました。

外岡先生からは深遠なる内容の本を紹介していただいたり、糸長先生からもご自身に関係する興味深いシンポのご案内をいただき、月例会では研究談話会メンバーからの新鮮な話題提供や深い議論を展開される等々、この歳で素晴らしいリカレントの環境にあることの幸福感に浸っています。

皆様さま方に感謝です。

この先も、熱い議論が続きますことを念じております。

岡田幸幸

#### ■4-7. 熊澤→岡田:熊澤前メール(熊澤■4-5.)差し替え

2023年11月2日(木) 14:20

岡田先生へ

身に余るお言葉で恐縮しております。熊澤です。

執筆者としては惰性で長くなった箇所も自覚しており、恥ずかし限りです。

本日、見直していたら、やはり間違い、論旨の曲がりなどいくつか決定的なものを見つけてしまいました。校正を終えたつもりでしたが甘かった様です。

既にお読み頂いているところ申し訳ございませんが、差し替えのほどお願い申し上げます。

#### ■4-8. 熊澤→岡田:岡田(■4-6.)への回答の補遺

2023年11月4日(日) 1:54

岡田先生へ

連絡が続き、恐縮致します。熊澤です。

今朝方、【熊澤③】を読み直していたら、岡田先生の質問を読み飛ばしていた(むしろ理解していなかった)ことが分かりました。

急遽、補遺としてまとめましたのでご参考に頂ければ幸いです。

#### 【熊澤③】補遺

岡田先生の質問に一点、答えられていないことを発見しましたので補完の議論として、論じておきたいと思っております。

まず、岡田先生からの質問に対する、11月に脱稿した【熊澤③】までを含む熊澤の回答の問題点をできる限り簡潔にまとめます。

完答したのは【岡田③】(p.75左)で示された、

1)熊澤先生はローマ人の美的感覚をバランスで説明されていましたが、ではなぜバランスの良いものが美しいと感じるのか。

2)建築物には Venustatis(美)がなぜ必要なのか。

1)は既に前稿および前々稿にて複数回議論しましたが、2)については熊澤の「美」の意味については説明しましたが「なぜ必要」については意図なく等閑視していました。なお、この2)の再質問として以下の通り岡田先生自ら意味を咀嚼してくれました。

2)熊澤先生が考える「強さ・用・美」における、「美」の意味(この場合は、今日の意味における「美」の意味を問うことになるかもしれませんが、歴史的事実という解説(知識)を超えて、熊澤先生ご自身の「美」の意味:建築物にはなぜ「美」が必要なのか)のお考えをお聞きたいです。

さらに、この2)については注意深く読んでみると、

a.熊澤が考える「美」の意味

b.建築物にはなぜ「美」が必要なのか

の二つの問いが含まれています。ただし、この二つの言説は、「:」で区切られているので、基本は、aの具体的な例にあたるのがbの答えとなると、形式的には読み取れます。

つまり、熊澤の「美」についての意味が、「建物に「美」が必要である」の回答になっていなければならないことに、今朝方読み直して気が付きました。正直に申し上げて、この論理構造を読み解かず回答していたことは、告白しなければなりません。

さて、もう少し問題を分解して考えてみると、言説a,bの位置づけがとても重要だと気付きました。この文章の読み解きとして、少なくとも二重の条件が隠されていました。

1. 言説 a の熊澤が考える美があらゆる美の一般則の場合、b の「建物」の必要条件として

「美」(一般則の美)を説明することが求められている。

2. 言説 a の熊澤が考える美が建築の範囲のみに適応されるべき美(「建築美」と呼びます)の場合、b の「建物」の必要条件として建築美を説明することが求められている。

場合1と2の違いは、「美」が一般か特殊か、というその概念の範囲の大きさであり、この違いにより、回答の意味が変わってしまうので注意が必要ということに気がつきました。

【熊澤③】の10頁以降で記した(「4. 熊澤の「美」の意味について」)「美」は、飽くまでも先の条件でいうところの「建築美」を答えたに過ぎません。

上の分析を踏まえて、2)の①「建築物には Venustatis(美)がなぜ必要なのか。」(古代ローマ帝国時代)②「建築物にはなぜ「美」(=建築美)が必要なのか。」(現代、特に熊澤の答えの範囲)を岡田先生の趣旨に従って、再考察してみたいと思います。

#### 1.古代における美の必要性(①)について

前稿において、熊澤が理解している範囲で、ウィトルウィウスの建築思想から美の理について解説しました。その結論を三段論法的に整理すると、

・小前提:建物は、強さ/用/美の理が保たれる必要がある。『建築書』第一書第4章2より要約)

・大前提:美の理は、建物の各部位がシュメトリアに適応されているときに実

現する。『建築書』第一書第2章3より要約)

・結論:建物は、その各部位がシムメトリアに適応されなければならない。

と書きあらわすことができそうです。従って、これらの言説の論理構造をもとに考えると、「美(用/強さ)の理」が中項となり、小前提の原因になります。従って、①については、かなり明快に答えられそうです。ウィトルウィウスが理解したギリシア建築の原理においては、「強さ/用/美」が、建物がシムメトリアに適応されるための原因となるため、「建築物には Venustatis(美)が必要」という命題の妥当性を導くことができそうです。

## 2.現代における美の必要性(②について)

現代の建築物における美の問題を考えるに当たって、【岡田②】において、建築物、構造物、建築、建物が混在して議論されていることに注目します(悪い意味ではありません。現代の日本において、建築をめぐる概念が多様に語られる状況を示している気がします)。特に、学生時代にお聞きになった建築の説教が影響していると拝察しました。

「美がなければ建築とは言えない」(【ibid.】)の表現は明らかに、建築物以上の何かかが「建築」に含意されています。憶測の域は出ませんが、「建築が建築物の観念」ではないかと思えます。現代では、建築を建築物の上位概念として、あるいはその観念としてひろく議論されているように思えます。しかし古代ギリシアでは、建築は αρχιτεκτονική τέχνη:アルキテクトニケー・テクネーであり、建築制作の棟梁 αρχιτέκτων:アルキテクトーンの技術を意味していました。つまり、現代のように純粋に「建築」を理念的に捉える(建物の最高類概念)視点が存在しなかったと思います(棟梁に属する技術、即ち知の一形態)。従って、現代において「建築物の美の必要性」を検討するという課題について、この観点は欠くことができないこととお認め頂けるものと思います。つまり、

・命題 p:建築物であるならば、建築を実現している。(現代の一般論)

・命題 q:建築物であるならば、建築美を実現している。(熊澤の主張)

では建築と建築美はどちらがより深い根拠でしょうか;「建築は建築美の一具体例」なのでしょうか。それと逆に、「建築美は建築の一具体例」なのでしょうか。

前者であれば、建築を中項として、「建築物が建築である」ための原因となり、結論として「建築物は建築美を実現している。」を命題として得ます(命題 r)。また、後者であれば、同様に建築美を中項して「建築物は建築を実現している。」という命題を得ます(命題 s)。

ただし、前者の仮説は無理があることは、既に気づかれていますかと思えます。あらゆる建築物の根拠となる建築が、建築美のみに基礎づけられるとしては、建築の用、そして強さの概念が排除されてしまいます。しかし後者の「建築美は建築を根拠とする」仮説は、先の用、強さの問題を排除することはありません。なぜならば、建築という概念に美は勿論のこと、用、強さの要素を含むから。従って、建築美は建築という観念の具体化の一つであり、その逆ではありません。

建築美が、「建築物は建築を実現している」という命題を成立させている中項である限り、建築物は建築美を原因にもつことが、推論されます。つまり、「建築物は、建築美を必要とする」ことは、因果律の推論によりその妥当性を確認することができます。それ故、冒頭に問われた②「建築物にはなぜ“美”(=建築美)が必要なのか」の答えは、「建築美が建築の原因を構成するため」というきわめて形式的な回答をお示しすることは可能です。

以上は、論理的な枠組みを借りて、推論により建築物が建築美を必要とするものの可能性を「形式的にのみ」示しました。しかし「建築そのもの」と「建築美」の関係、また「建築そのもの」と「美そのもの」との関係は全く議論されていないことにご留意下さい。この問題は先の通り単純に形式的に答えられません。むしろ、建築、美それぞれの本質に向かってその意味を明らかにすることが求められます。

令和5年11月4日

熊澤 栄二

## ■4-9. 岡田→熊澤:これまでのやりとりに関する雑感

2023年11月6日(月) 18:29

熊澤先生、皆様

返す返すも恐縮です。当方の意図をお酌み取りいただき、さらに詳細な解説を頂き誠に有り難く思います。

私からの雑ばくな感想と次なる本命論考への期待表明を兼ねて、【岡田④】と関連論文(?)を添付致します。

岡田成幸

### 【熊澤③】と【熊澤③補遺】に対する感想など

これまで同様に、引用文献の番号を以下とします。

【岡田①】(2023年9月12日付け発信):美に関する私的考察

【熊澤①】(2023年9月21日付け発信):「美に関する私的考察」について その1—古代建築の美

【岡田②】(2023年9月23日付け発信):「美に関する私的考察」について その1—古代建築の美 に対する質問並びに若干の考察

【熊澤②】(2023年10月9日付け発信):「美に関する私的考察」について その2—「古代建築の美」への回答と美の自律性

【岡田③】(2023年10月18日付け発信):これまでの議論の整理と再質問

【熊澤③】(2023年11月1日付け発信):「美に関する私的考察」について その3—「これまでの議論の整理と再質問」への回答1

【熊澤③補遺】(2023年11月4日付け発信):【熊澤③】補遺

熊澤先生の古代哲学史を追った解説を一言で要約してしまうと、「古代ギリシア・ローマ時代における「建築物の“美”」のとらえ方は、シムメトリアの実現による様式美である。」と結論付けられるようです。

ウィトルウィウスに対する私の根源的疑問(建築物の要素が強さ・用・美の3分因として表現されたこと)が、私の学生時代に学んだウィトルウィウスの現代的解釈(「強がなければ用は果たせない。強と用が無ければ美は形だけのもの。そして、美がなければ建築とは言えない。」の言説)にあったことは、よく分かりました。現代的解釈であるとは知らなかったので、建築の要素が3つに分かれる原因を私なりに解釈したものが【岡田①】の論考であり、私なりの“美”の自立的意味づけでした。以下に要約します。

それは、建築物の「持続可能性」の目標として「万人に永続性を期待させるものは“美”である」との思いが共有されていたからではないか、というものでした。では、その“美”とは何かを【岡田①】で6章「美」とは何かという、岡田の感性

的考察」で展開しました。それが“美意識”です。

【岡田①】の考察は、熊澤先生からの解説で古代ギリシア・ローマ時代の解釈では全く受け入れられないものと、今は理解しておりますが、現代的解釈として成立しないだろうか、という思いがあり熊澤先生へのその後の幾たびかの質問となっているのです。つまり、自立的“美”についての議論を、古代ギリシア・ローマ時代ではなく、現代における位置づけとして議論してみたいのです。ウイトルウィウスは「美」という言葉を使ったにもかかわらず、またギリシア時代から「美」の対象として、(1)人や物の外形、(2)人間の営為・仕事、風俗習慣、制度、法、学問、そして、(3)道徳的行為、のすべてを包括するので、…「立派な」「すぐれた」「善い」「ふさわしい」「めめられるべき」「名誉とされる」というような言葉で表現されるほうがむしろ適切な場合がある(【熊澤③】の北嶋氏の「ギリシア語の美」(p.78 左 f.)について)にもかかわらず、ウイトルウィウスは建築物の「美」をシュムメトリアという幾何学的比例関係のみ捉えようとしていたらしいのですが、そうであるなら私の興味は北嶋氏が言う「ギリシア語の美」に移行してしまいました。【熊澤②】(p.73 左)において森田氏を引用し、「ウイトルウィウスですらシュムメトリアをカノン(kanōn)として(ある意味)誤読していた可能性を森田が指摘しているところです。」とあるくらいなので、ウイトルウィウスにとらわれることなく、現代的解釈としての“美”の自律的意味を掘り下げたいのです。

【熊澤③補遺】において、私の熊澤先生に対する以下の質問が二重構造を持っているとの指摘【p.83 右】がありました。それは、以上の思いが私の頭の中にあつたからに相違ありません。

- a. 熊澤先生が考える「美」の意味は何か
- b. 建築物にはなぜ「美」が必要なのか  
ふつつであるなら
- b. 建築物にはなぜ「美」が必要なのか  
a. 熊澤先生が考える「美」の意味は何か

という順に問いが発せられるはずですが。私は問いの前提として、「熊澤先生は建築の必要要素としての強さ・用・美は認められている」と思っていました。それで、あえて a.→b.の逆順で問いをぶつけてみたわけです。b.→a.の順質問では、建築物に対する“(必要)美”を問いかける質問にしかならないからです。私の a.→b.の逆順質問に対して【熊澤③補遺】でその回答(p.84 左)は「建築の“美”として一部得られました(私が求めた本来の回答は次稿という回答【ibid. 右】)でした」。

【岡田①】での論点は、建築行為に限らずビジネス世界でも使われている、言葉にできない「生き方」「世界観」「イデオロギー」の到達点として“美意識(美を追い求める意識)”を位置づけているのではないかとこの考察です。しかし未だその“美”の実態は掴み切れていない(表現できていない)ので、皆さま方のご意見を拝聴したかったです。

ウイトルウィウスの現代的解釈に則るならば、現代解釈における“美”が、建築物にも要請されている理由は何なのであろうか？それをつきつめていくことで、建築のあるべき未来が見えてくるのではないかという思いからです。繰り返します。現代的“強さ”と“用”に関しては、「科学的合理性」の下で評価が可能です。たとえば“強さ”はその材料に加わる応力に対する材料が保有する応力比で決まります。どこまでの強さを要求するかは「社会的合理性」の範疇です。また“用”に関しては、“用”を判断する各種項目(たとえば“ねぐら”)としての有用性をどの程度満たしているかは、保温性・遮音性・遮蔽性等々)についての評価尺度を用いてその実効率を計算すれば算出できます。しかし“美”はどうでしょう。なにをもって“美”を有していると言えるのでしょうか。先の北嶋氏の

「ギリシア語の美」で触れられている「善」に近いものかもしれませんが、それだけではない。この自問自答に対しての岡田の解が【岡田①】で示した「建築物の「持続可能性」の目標として「万人に永続性を期待させるものは“美”である」とし、人間個々人が持つそれぞれの感性の最高峰として“美”を位置づけ、それを追い求め続ける姿(意識)こそが“美”といえるもの」との解釈でした。“美”の科学的評価として幾何学的比例関係(シュムメトリアの一部の意味)を上げることはできるかもしれませんが。しかし日本芸術が持つ幾何学的非対称である流れの“美”や詫び寂びに感じる枯れの“美”、建築行為が持つ“美”、システムが持つアルゴリズム的“美”、そして社会制度が到達すべき“美”、いわゆる“美”そのものの本質はウイトルウィウスが言うところの古代ギリシア・ローマ時代に語り継がれた限定的シュムメトリア(幾何学的比例関係)では説明できません。私が熊澤先生に問いかけた質問 a.はその意味での質問でした。先に書きましたように、私の頭の中には【岡田①】の考察が残っていたため、質問が先走り、混乱させてしまったかもしれません。

熊澤先生からの回答は「建築の“美”」については記載がありましたが、上位概念としての“美”については次の論考を待たれよ(【熊澤③】の文末に「これ以上の芸術についての考察は、「3.自律の意味について」【岡田③】(p.76 右)の報告に譲りたいと思います(芸術もしくは美の問題を自律的な観点から論じるのは、美学を学と確立したI. カントおよびF.シラーの18世紀以降の動向を交えて考察したいと思います)【p.82 左】)とのことでした。物理学的意味における対称性の議論とともに楽しみに待っています。

さて、【熊澤③】に気になる考察がありましたので触れておきます。

【熊澤③】において、熊澤先生がお考えの「建築の“美”」については、4章「熊澤の“美”の意味について」の最後で語られています。「弁解ではなく、私としては論文においても「美」ということを積極的に論じたことが無いことを記しておきたいと思います。…避けていた訳ではなく、「美しい」と感じることを主題にできないからと感じています。…」【ibid.】と記載されています。この「主題にできない」という文意を解釈するにひよとして、美に関する意識感覚は個人個人の好き嫌い(個人的感想)で決まるものであるとの思いがあるのではないかと、失礼ながら推察した次第です(間違っていたらごめんなさい)。個人個人が生まれ育った環境やバックグラウンドを思考に反映させてはならないというのが哲学思考の大原則です。私的事情を前提とした思考は、そうした前提を共有しない人々を説得することはできないからです。哲学とは普遍性を指向するものだと思うからです。

しかし、形相上の美醜以外にも美しいと感じることは、人間誰も経験済みです。私的経験で恐縮ですが、ヴィクトル・ユーゴーのレ・ミゼラブルにはモデルがいると言うことです。母が娘を思い自分の毛髪・前歯を売ってまで守ろうとする行為に、少年時代に涙した思いがあります。小説内の文章としては、髪を切り落とす姿が哀れに描かれていたと思うのですが、当時の自分の頭の中には、イメージとして母親としての美しい姿が浮かびました。その記述に感動するかどうかは、育ってきた環境や感受性の多寡など個人的条件によるもので哲学の対象外の話です。しかしこの話自体に共感できないにしても似たような感情(姿形以外のものに“美”を認める思い)は、人間共通の普遍性があるのではないかとこの考察です。これこそがカントの言う「目的なき合目的性」であり、“美”という形式がそこには存在しているのだと理解したいのですが、いかがでしょうか。

話が変わりますが、“美意識”を数量評価できないかと考えています。私の研

研究室でかつて、被災時の精神状態を数量モデルで記載することを試みました。京大防災研・研究発表講演会で発表したアブストラクト(2018年2月)を添付します。精神的不安定状態を示す評価尺度としてK6(Kessler's index)があります。被災時の精神状態を負の極値状態とみなすことにより、これを極値理論でモデル化したものです。哲学的考察により“美”なる尺度が定量評価できたならこのような統計学的アプローチでつなぐことにより、美の極値として“美意識”を探ることは可能になるのではないかと夢を抱いています。

#### 添付文献

岡田成幸・中嶋唯貴・有吉一葉・牧紀男・瀧澤一起:被災者の心の復興 ～精神的苦痛の計量及びその時間推移モデルの構築～,平成29年度京都大学防災研究所 研究発表講演会,2018年2月21日(京都大学宇治キャンパス)。

#### ■4-10. 熊澤→岡田:返信

2023年11月8日(水) 12:12

岡田先生へ

雑感とは思えないほど構成の行き届いた文章、恐れ入ります。熊澤です。

昨日も業務のあい間に拝読させて頂きました。

レ・ミゼラブルに登場した母の姿に醜美を超えた美しさを感じられたという話から、「道徳的行為は、それがあたかもおのずからに生ずる自然の結果であるかのように見えるとき、はじめて美的行為となるでしょう。一言にしていえば、自由な行為は、心情の自律と現象における自律とが相互に一致するとき、美しい行為となるのです。」(F. シラー:「一七九三年二月十九日」返信/『美と芸術の理論—カリアス書簡』)とのシラーの言葉を思い出しました。

シラーは、友人ケルナー宛て返信書簡にて、自らの美の理論の要諦を伝えるため、厳冬の真ただ中に追剥ぎにあい丸裸にされた男の寓話を持ち出します。その男に対して偶然出会った旅人がなした5種類の道徳的な行為を事例として、感情的、功利的、純粋に道徳的(自己犠牲的)、寛大的(克己)、美的の五つの道徳行為について解説しています。

レ・ミゼラブルは恥ずかしながら読んでいないで、岡田先生からお示し頂いた母子愛譚は先生の感想をもとに想像するほかありません。しかし先のシラーが示した「美的」道徳的行為に通ずるのかな?と(無責任にも)推測しております。

シラーはこの第五の男の行為がなぜ美的かとの考えを次のように示しています。「ただ第五の者だけが、要求されることもなく、熟慮することもなく、自分の負担となることも顧みないで救助したのです。ただ第五の者だけが、その際、まったくわれを忘れて、やすやすと、あたかも本能のみから出たかのように行ったのです。」と。そして、冒頭に紹介したシラーの言葉へと続きます。

さてカントは、判断力批判において、一あの難解なカント文相も相まって、道徳と美の分離よついに曖昧にされてきたとの嫌いも感じています。しかしシラーとて本人が明言するほど、美についての客観性の確立がどれほど成功したのか、一介の建築論の研究者が判断することは荷が重く感じます。目的論まで含む議論は、その課題の構造上、実践的な道徳について踏み込み検討する必要もあり、メールの返信では単に冗長な議論に付き合わせてしまう非礼に今、書きながら気が付いた次第です(悪い癖です。次の授業準備のため、断念致します)。

中途半端な返信になりますことご寛恕下さい。なお、美意識の定量化という着眼点は興味をそそられます。またご教示願えれば幸いです。

#### V. 富樫主催による研究談話会の意義

##### ■5-1. 外岡豊→岡田:岡田のメール(岡田■2-6.)への応答

2023年9月22日(金) 8:19

すみません 私が 岡田はニヒルだと言った? 8月の例会のことで?

気になるようでしたら 発言取り消し 謝罪

埼玉大に行っていて テザリング 切れ切れで 何が何だか よく覚えていません

討論録画を見直せばよい? ですが 時間が無くて見直していません

芸術の意味を再考すべきなので 近々 見直して再論しますか

京都宴会 来ていただければ 討論もできた??

外岡 豊

##### ■5-2. 岡田→外岡:ニヒル対談

2023年9月23日(土) 9:53

外岡先生

メール有り難うございます。

私の人生において、ニヒルと言われたことはこれまでなかったので、とても新鮮に印象深いコメントでしたので、覚えていました。

私の何がニヒルだったのか、私のニヒルの定義と異なるのかと興味があった。

8月例会ではなく、だいぶ前の例会でのことだったと思います。

私がニヒリズム批判をしたことがきっかけだったかもしれません。

先生に覚えがないのであれば、それほど深い意味ではなかったのでしょうか。

これはこれとして、また鋭い突っ込みをよろしく願います。

先生の発言を契機とし、私の人生でこれまでにない考えを刺激してくれるので、いつも楽しみにしています。

岡田成幸

##### ■5-3. 外岡→岡田:研究談話会の役割

2023年9月23日(土) 11:15

ニーチェをよく知らなかった ニヒリズムの定義も今でもあやふや 数年前に副島隆彦 学者ではない物書き いかにも早稲田卒 まあディレタントといえはよいのか

幅広く読んで来た人らしい 彼が書いたニーチェ論を読んで あの理解に苦しむ言動をようやく、なぜそうだったのか、ちょっと理解した 三島由紀夫の苦しみも同様、理解できないでいたが、ある時から、そうだったのか、と一応理解できるようになった いまだにわからないのはドストエフスキーか もう50年読んでいないが

そんなニヒリズム認識なので、私の発言の中では異常に質が悪い発言であったと言えるだろうか

それより芸術の意義を再発見することに今は興味がある 日経新聞 毎週 土曜日 今日掲載 詩歌教養のページ このところ ずっと 若松英輔 言葉のちから

この毎週の記事でも、それに通ずる話題が多い 言葉の裏側への注視 えも言われぬ何かを伝える 伝わる 文化の醸成 周辺にやどる気体のようなもの 時空を超えて人の心から心へ飛ぶ それこそ「言葉のちから」 漢の古典が今にも通じる 古事記も万葉集もしかし 誤解はあるかもしれないが感覚は反応する

科学する必要はないが、科学すると、それはどのような現象として説明できるのか??

8月の芸術論の続きを書いて、熊さん他と継続討論したいが 別件優先で遅らせている

建築学会大会で札幌で会って雑談から早1年 今年是一般発表もシンポもリアル集合 一般発表は大した質問もなく討論の時間もなし シンポはなぜか学生は来ない 大会参加者は多いはずなのに地球環境委員会シンポは60人程度 地球環境委員会傘下の小委員会の委員もシンポに来ていない 糸長浩司主導の企画が会員多数の興味と一致していないと理解すべきなのか

大岡委員長(頼まれ委員長で彼がひっぱってはいない)のカーボンニュートラル特別調査委員会シンポはやるきがないものだった 気候危機への危機感がない 鬼気迫るものがない

当研究談話会は前向きでよい 富樫氏は電話ですぐに1時間長話になるが自宅で孤立作業している身には、よい刺激、元気、活性化のもと 彼の余力が支え 貴重な貢献

この数年 当研究談話会に支えられてやる気を保ってきたようなもの 岡田さんの深い読書ときっちりしたまとめた確な説明はピカイ 熊さんは、責任感ある発表、真摯な態度が光る 今回 木俣氏が京都に来ると言って来なかったのは残念 さすがに高齢化したか 私自身は8月1日夜に京都で熱中症になり いまだに後遺症が微妙に不調 政府も民間も社会と国家と日本人と仲間に対する無責任感覚がかなり深刻 新日本病 急激な円安で何かが始まる それは 新失われた30年 旧来の30年とは 逆側になった状況での もっと深刻な新失われた30年が始まった のだろうと 状況をそのように見出している この見解は最近始まった 気が付いたばかり まだ誰にも伝えていなかった

今日は気温も下がった 知らぬ間に時は流れてゆく 季節も変わる 秋来ぬと目にはさやか(彩か?)に見えねども...

外岡 豊 9月23日 彼岸 藤沢市鶴沼は 曇天 室内気温26℃ 湿度85% 今日風は風の音に驚く日和ではない

[了]